転生と…

アフターストーリー

秋華

ゴッドブレス

バトルグリード。
２０１１年に発売された、格闘アクションシューティングゲーム。
インターネット回線を、高速で安定させる事ができるようになり、可能となったゲーム。
このゲームの発売により、インターネットゲームプロなるものが現実味をおびてきた。
俺、川神大輔、高校二年の頃だった。
バトルグリードは、好成績者に１００万円の賞金を出す事で話題になった。
１０００連勝したら１００万円。
はっきり言って無理な数字。
俺達ゲーム仲間は、発売当時からゲームにはまったけれど、せいぜい１０連勝するのがやっとだった。
賞金なんて、手に入れる人は絶対いない。
俺達は思っていた。
しかし、２０１１年秋、突如とあらわれた、ドリームダストという名の機体。
最初から最後まで、一度も負ける事無く、１０００連勝を達成してしまった。
俺達は最初、販売会社の自作自演だと疑った。
でも、最終戦の戦闘内容を、友達が録画保存していて、それを見せてもらった時、これは実力だと確信した。
華麗な動き、人間業と思えない連携、思いもつかない戦術と対応力。
俺は、ドリームダストに惚れた。
後日、ゲーム情報番組に、ドリームダストのプレイヤが、テレビに出ていた。
驚いた。
俺よりも歳下の、女の子二人。
しかも可愛い。
俺は更に、ドリームダスト、そしてこの二人にのめりこんだ。
それだけではない。
この学校のゲーム部にも興味を持った。
テレビには、この森ノ宮学園高校の、ゲーム部のメンバーが出演していた。
部長の機体と、ドリームダストの対戦を放送していた。
ドリームダストだけではない。
部長と部員が操る機体も、なかなか凄い。
ただのゲーム。
それでも、極めればこれほどの芸術が生まれるのか。
いつしか、俺の目標は、打倒森学、打倒ドリームダストとなった。

２０１２年春。
あの華麗なドリームダストを見てから半年、俺達は成長した。
毎日毎日が、研究と練習の日々。
そのかいあって、チームの部と、チームダブルの部で、俺達は全国大会出場を果たした。
まずはチームダブル。
準決勝まで何とか勝ち進んだ。
そして、やっと念願の、森学ゲーム部との対戦。
ドリームダストの二人に、部長、そして攻撃が得意そうな部員。
おそらくは、現在最強のチームダブルだ。
胸をかりるつもりで、ぶつかっていった。

完敗だった。
追尾ミサイルが、かわせない。
裏技みたいだけど、流石に森学ゲーム部だ。
研究している。
俺達は、まだまだだった。
次の日の朝、掲示板に、追尾ミサイルについての書き込みがあった。
森学ゲーム部だ。
裏技を公開するなんて、なんとも余裕だと思った。
少し悔しかった。
だから俺達は、朝から練習した。
チーム戦が始まった。
俺は順調に勝ち進んだ。
そして準決勝、相手は森学ゲーム部の部長の機体、ブライトスター。
テレビでドリームダストと良い勝負をしていた機体だ。
強敵だ。
しかし、これに勝てれば、決勝でドリームダストとやれる。
ゲームがスタートした。
出し惜しみはできない。
俺は、朝知ったばかりの裏技で攻撃した。
向こうも同じタイミングで攻撃してくる。
回避のタイミングが合えば、かわせる事に気がついていた。
頼む。
かわせてくれ。
俺の願いが通じたのか、最初の追尾ミサイルをかわした。
勝てる。
相手はかわせなかったようだ。
しかも、何故か動きが止まっている。
俺は攻撃を止めない。
ビーム砲が、敵機体に命中した。
勝てると確信した。
後は追尾ミサイルを確実に当てていければ。
裏技で、追尾ミサイルを発射。
向こうは撃ってこない。
よし、これも当たる。
向こうは動きを止めた。
あきらめたか？
いや、追尾ミサイルを、追尾ミサイルで迎撃してきた。
なんだ？
何故当たる？
ミサイルでミサイルを落とすなんて、人間業じゃない。
それも直前で。
直前？
なんだろう。
何かが引っかかるけど。
とにかく追尾ミサイル回避。
ビーム砲は仕方がない。

いやな攻撃をしてくる。
しかし。
俺は再び裏技で、追尾ミサイルを発射した。
なんだ？
また一瞬機体を止めた。
かと思うと、追尾ミサイルが迎撃された。
なんだよ。
森学は、ドリームダストだけではないとは思っていたけれど、化け物の集まりか？
追尾ミサイルとビーム砲が襲ってくる。
とりあえず、追尾ミサイルだけは回避。
ビーム砲が、俺の機体に命中する。
くそっ！
ゲージは既に五分だ。
このままでは勝てない。
俺達は戦術を変える事にした。
接近戦だ。
俺は元々接近戦の方が得意なんだ。
あっ！裏技の追尾ミサイルを撃たれた。
そしてまた、両脇をビーム砲が抜けてゆく。
か、かわせない！
「ドーン・・・」、と爆発音が鳴り響いた。
あてられた。
最後ので、ゲージが逆転、時間切れ判定で負けた。
悔しかった。

２０１２年の夏休み最後。
バトルグリードの全国大会。
夏休み最後の日曜日、春の大会以降、１００戦以上バトルしている機体の勝率上位２機が、決勝を行う。
時間指定で、自宅からのアクセス。
前からわかっていたけど、全ての決勝に、ドリームダストの名前も、森学の名前も無かった。
どうやら今回の大会には、参加しなかったようだ。
真剣にやって、出てこれなかったわけではないだろう。
あれだけ強い彼女たちが、真面目にやって負けるなんて、考えられなかった。
俺達は、チームで優勝、チームダブルで準優勝した。
しかし、なんだかむなしかった。

そして時は流れて、２０１３年３月。
　大輔「ドリームダスト、戻ってきたな。」
　竜郎「ああ。すんげぇ萌えるぜ！」
　吐息「ひゃは。リベンジするのさ。」
　沙羅「ええ、今回は勝算あるわよ。」
　乙女「私はダメかも～」
俺達は今、バトルグリードの勝率ランキング画面を見ていた。
そこに、久しぶりに表示されていた、ドリームダストの文字。

もちろん、ランキングは１位の位置だ。
９９勝１敗。
全勝できてくれるかと思ったけれど、流石に最近は、力が近づいてきていた。
打倒ドリームダストは、俺達だけの目標ではないって事。
　吐息「私は、ブライトスターにリベンジしたいのさ。」
５位のところに、ブライトスターの文字。
去年、俺と蓮羽吐息のゴッドブレスが破れた相手だ。
　大輔「嬉しいねぇ。両方出てきてくれるなんて。」
　竜郎「チームはお前達に譲るんだから、勝てよ。」
　沙羅「ただ単に、ベスト１６に入れなかっただけ、だけどね。」
　乙女「そ、それを言っちゃ、だめだよぉ～」
ゴッドブレスは、２位のところに表示されている。
戦績は、９７勝３敗。
現状では、ブライトスターよりも上だ。
　沙羅「私は、シングルで頑張るわ。」
　乙女「私もだよぉ～」
　大輔「そっちは任せた。」
シングルでは、赤石沙羅のレッドストーンと、玉城乙女のマイヒメがエントリーしている。
順位は４位と８位で、まあおそらく大丈夫だろう。
　竜郎「俺はチームダブルと、ダブルか。」
　大輔「そのへんは、みんな出てるけどな。」
ダブルでは、俺のビッグゴッドと赤石沙羅のレッドストーンのペア、南竜郎のサウスドラゴンと玉城乙女のマイヒメのペアがエントリーしている。
で、チームダブルは、俺と玉城乙女のビーナスと、南竜郎と蓮羽吐息のドラゴンブレスのチームで出撃だ。
名前の付け方は、森学ゲーム部の影響を受けて、名前の一部を英語にして組み合わせている。
ドリームダストは、ライバルであり、俺達のあこがれだから。
ゲームで、賞金を稼ぐ。
なんて夢のような響き。
将棋のプロ、囲碁のプロがあるのだから、ゲームのプロがあっても良いじゃないだろうか？
昨年の俺達の獲得賞金は、１００万円。
人気と共に、賞金が上がっている。
今回は、決勝トーナメント進出で５万円、準優勝に５０万円、優勝に１００万円が出る。
賞金総額は９２０万円。
ユーザが今まだ増えている事を考えると、来年には倍になっているかもしれない。
更には、他のゲーム会社も、同じような事を始めている。
俺達は、それら全てに参加し、賞金を稼ぐ集団を目指していた。
森学のゲーム部が、ドリームダストなるサークルを作った。
だから、俺達もそれにならって、ゴッドブレスなるサークルを立ち上げたのだった。
数日前には、みんな高校を卒業してプータロー。
このサークル活動に、全ての力をつぎ込む。
活動場所は、昨年の賞金をつぎ込んで借りた、ワンルームマンション。
そこにテレビ５台と、ゲーム機３種が５台ずつ。
更にＰＣが５台。
それ以外には冷蔵庫くらいしかない部屋。
ココが俺達の出発点だ。

十分かな？
　大輔「よし、バトルグリードは、今日はオッケーだ。リノ２でアイテム集めて売るぞ。」
　吐息「面倒なのさ。」
　竜郎「こんなせこせこしたのは俺にはあわんぜ！」
　沙羅「じゃあ、アルバイトして、家賃はらってくれるの？」
　乙女「うわぁ～竜郎ありがとぉ～」
　竜郎「リノ２でアイテム集めます。」
俺達は、ゲームの賞金を狙う以外に、地道にゲームアイテムを集めて、売っていたりもする。
賞金だけで家賃を払っていくなんて、そんな怖い事できません。
でもまあ、なんとかなりそうだけどね。
　大輔「でも、やっぱ賞金で生活したいから、決勝トーナメントは、森学とは別ブロックが良いな。」
　吐息「そこは前日泊まり込みで調整なのだ。」
　沙羅「そうね。なんとかなるでしょ。」
予選通過順位確定は、３月２０日の２４時。
だから２０日は、みんなでココに泊まり込みだ。
「カタコン！」と、玄関の方から音が聞こえた。
マンションのドアポストに、郵便物が落ちる音だ。
　乙女「何かきたよぉ～」
　大輔「あっ！誰かとって。」
　吐息「忙しいのさ。」
　沙羅「竜郎が行くのが一番でしょ。」
　竜郎「なんで俺がぁ。」
この会話を聞いただけで、俺達の関係が微妙にわかった？
竜郎がＰＣから離れて、玄関へと歩いていった。
そしてドアポストの蓋を開けて、中の物を取り出す。
　竜郎「バトルグリード株式会社？」
　大輔「ああ、なんか会社名変えたってな。そっちのが圧倒的にネームバリューあるから。」
バトルグリードの制作会社は、以前は違う名前だったんだけど、あまりにも知名度が低かったので、最近名前を変えたらしい。
まあ確かに、俺が社長でもそうしたかもな。
　竜郎「なるほどな。」
　沙羅「たぶん、バトルグリード３のパンフが届いたんでしょ？」
今回の大会を最後に、４月１１日発売のバトルグリード３にバージョンアップされる。
前回２になった時は、ダブルとチームダブルの新設以外は、あまり変更が無かったけれど、今回はもう少し変更が有るらしい。
　乙女「バージョンアップ価格で売ってくれるのかなぁ～？」
　吐息「売ってくれないと、今お金がピンチなのさ。」
　大輔「無理デソ。大会で稼ぐしかないな。」
春の大会で勝てば、まあ楽勝で買えるのである。
参加賞で３０万円はほぼ確定してはいるけれど、他のゲームの購入と、家賃の支払いに使う予定だ。
　竜郎「で、もう一つなんか来てるんだけど、株式会社コウエンからだけど、何かわかる？」
　大輔「ああ、バトルグリード３と発売をあわせてきてる、三国志オンラインのパンフと予約キーだろ？」
　沙羅「賞金出るネットゲね。」
　吐息「来月からは、そっちも頑張らないといけないのさ。」
　乙女「大変ですぅ～」

三国志オンラインは、コウエンの人気ゲームをネットゲームにした奴だ。
舞台はもちろんその頃の中国で、どこかの勢力に、自分のキャラを登録する。
で、戦いに参加して暴れて、その活躍でポイントが加算される。
ポイントでまあ色々競うわけだけど、そのへんはパンフレットを見てみないとわからない。
俺は、一旦リノ２をやめて、部屋の真ん中のテーブルについた。
そこに竜郎が２つの封筒をもってくる。
他の面子も、順次ゲームを中断した。
　大輔「先にコウエンのを見せてくれ。」
バトルグリード３は、だいたい話は聞いているので、とりあえず三国志オンラインが気になった。
　乙女「うん、みよみよぉ～」
竜郎が、でかい封筒を適当に破く。
そして中から、パンフレットを取り出した。
　竜郎「画像は、今までのと変わらないな。」
　吐息「まあ、ネットゲにしただけなのさ。」
表紙には、赤兎馬に乗った関羽が、青龍偃月刀を持っている絵だ。
　沙羅「格好良い。」
沙羅は、三国志が大好きだ。
中でも諸葛亮が好きみたいだけれど、関羽も同じくらい好きらしい。
　大輔「早く中みようぜ。」
俺はグラフィックには興味がない。
むしろ３Ｄ映像はあまり好きではない。
特に人物。
バトルグリードは、戦闘機みたいな機体だから、リアルでも良いけど、人はねぇ。
竜郎がページをめくる。
　沙羅「なるほどね。最初はランダムで君主が決まるのね。」
最初のページには、初期設定の説明が書いてある。
まずは、キャラを作成。
レベルはもちろん最低からだ。
張昭と戦っても負けそうなくらい弱い。
ああ、わからない人に説明すると、張昭とは、呉の政策を担当していた人物だ。
戦いとは全く無縁の人物だけれど、ゲーム内では戦う事になる。
　竜郎「ああ。最初は董卓辺りにつきたいもんだな。」
　乙女「えぇ～いやだよぉ～あいつ嫌い～」
　大輔「楽しむなら劉備とか良いけど、レベル上げを早くしたいなら、董卓が美味しいだろうな。」
ランダムで決まるとは、かなり運が必要になる。
　吐息「一つのゲームで一人しか登録できないって、きついのだ。」
どうやら、何度もやり直しする事もできないみたいだ。
最初にキャラを作り、登録する。
で、決まった君主に仕える。
キャラを作りなおしても、君主の変更はできないらしい。
　沙羅「５つ買うしかないね。」
　大輔「まあ、初めからそのつもりだったけど。」
俺はページをめくった。
ポイントシステムについて書いてあった。
　竜郎「ＮＰＣぶっ殺して、１００Ｐ、プレイヤだと５００Ｐ、殺されるとマイナス１０００Ｐか。」
　吐息「戦闘に勝利で、軍に、（敵プレイヤ数－身方プレイヤ数（マイナスの場合は０））×５００Ｐ＋

総プレイヤ数＊５００Ｐ＋ＮＰＣキャラ×１００Ｐ、敗戦で、軍に、マイナス（味方プレイヤ数ー敵プレイヤ数（マイナスの場合は０））×５００Ｐ＋総プレイヤ数＊５００Ｐ＋ＮＰＣキャラ×１００Ｐなのさ。」
　大輔「これは、プレイ時間が多くても、あまり有利にならないように配慮されてるな。」
　沙羅「小が大を食った時には、ボーナスポイントね。大で負けたら最悪ね。」
だいたい此のポイント配置を見れば、バランスがわかる。
ある程度までレベルを上げれば、おそらくプレイヤのキャラは、ＮＰＣキャラの５倍強くなるはずだ。
最初は負けるんだろうけど。
　乙女「最初は、ポイントはすぐにステに振ったほうがいいねぇ～」
　大輔「ああ、０以下にはならないからな。」
　竜郎「これでポイントをためるとなると、大会は半年は先かな？」
　大輔「そんなにはかからんだろ？土日ずっとやったら、そこそこ強くできるんじゃないか？」
俺はページをめくった。
　沙羅「でも、軍師タイプはきつそうじゃない？」
次のページには、キャラの必殺技が紹介されていた。
武将タイプは、主に直接ぶつかり合って戦う。
だから、倒して得るポイントが得やすい。
でも軍師タイプは、直接のぶつかり合いが弱い。
そのかわり、フィールドの一部、又は全部に影響するような、策略という名の魔法が使えるようだ。
　吐息「今までのゲームとは少し違うのだ。」
　大輔「たしかに。」
この軍師タイプが、ネットゲームになって新たに搭載されたシステムか。
　沙羅「で、ＭＶＰシステムがあるわけね。」
　乙女「なるほどだよぉ～」
ＭＶＰシステムとは、策略により状況を優位にして勝利した場合、１０００Ｐ入るというシステムらしい。
　竜郎「でも、どちらかを選んでキャラを作成するわけじゃないだろ？基礎能力を上げるか、必殺技を覚えるか、計略や策略を覚えるかは自由。」
　吐息「だ。」
　沙羅「最初はやっぱり基礎能力中心で、必殺技を数個覚えるのが良いかもね。」
　乙女「計略は、後だろうねぇ。最初からいるＮＰＣの軍師に期待って事でぇ～」
パンフレットを読み終わり、俺達は再びリノ２を再開した。
後はとりあえず、やってみなくちゃわからないって結論。
バトルグリード３は、機体タイプが増えていたのが大きな変更点だったけど、概ねあまり変わらなかった。
バトルグリード株式会社、あこぎな商売しますなぁ。

幸せの再会

３月２０日の夜、俺達は部屋に集まっていた。
予選通過に微妙な順位ではなかったが、森学の連中とは、なるべく決勝まで当たりたくない。
何故なら、準優勝でも賞金が貰えるから。
俺個人の意見としては、テレビ局でもドリームダストの二人と会いたいから、是非決勝までいきたいってのが本音だけど。
　大輔「チームの順位はどうなってる？」
　吐息「１位はドリームダスト、２位は私達、ブライトスターが６位に落ちたのさ。」
　大輔「ブロックを外してきたのか？」
１位と５位だと同じブロックになるから、ブライトスターが一度わざと負けて、６位に下げて違うブロックに移動する。
戦略としてはあり得る方法。
　吐息「違うね。４位に入ってきたのがいるのさ。」
まあ、森学がいちいちブロックを外すなんて事をしないのは、前回大会でわかっている。
もっとも前回は、運営側が配慮して、トーナメントを組み替えていたけど、ブライトスターの優勝は少しそのへんで反感をかったからね。
今回は順位によるブロックが、最初から決められているのだ。
他にもあれから色々修正が加わっている。
裏技の方の追尾ミサイルは使用不可能になったし、電磁波をとばせる距離も大幅に短くなった。
大会運用面で最近問題になっているのが、うまい人が上位を独占して、大会に別人を出場させる事。
参加料目的と、上位まで簡単にいかせる事ができるメリットがある。
ぶっちゃけドリームダストの二人が、１６機使えば、トーナメント全てを独占する事ができるからね。
登録用パスワードを、他人が使った時の罰則などでは押さえられないので、大会前日に予選通過最終テストバトルがもうけられた。
ココで、順位相当でないふがいないバトルを披露してしまった場合、参加料は貰えない。
判断としては、最低勝利。
相手は、順位で２０位以下の人から選ぶらしいから、大敗するような事は普通に考えてありえない。
大敗したら、出場権も剥奪される事があるらしいが、このシステムは今回が初めての変更点なので、どうなる事やら。
とにかく不正する人がいない事を祈るだけだ。
　大輔「で、シングルはどうだ？」
　沙羅「ドリームが１位、ダストが３位、私が５位で、マイヒメが８位ね。」
　乙女「締め切りギリギリに、沙羅が一度負ければ、別ブロックになるねぇ～」
　大輔「だな。沙羅は様子を見て、バトルな。」
　沙羅「了解。」
でもどっちにしても、２戦目で森学のどちらかと当たってしまうから、シングルは厳しい。
賞金獲得には勝つしかない。
　大輔「ダブルは？」
　竜郎「森学のドリームのペアが１位だな。後はダストのペアが１０位。大輔のペアが３位で、俺のペアが１１位だ。」
　大輔「ココも両ブロックにいるのか。でも、パートナーが新人みたいだから、勝てるチャンスはあるだろう。」
　竜郎「まーな。」
　大輔「一応ブロック分けたいから、竜郎達は最後そのままなら、負けて一順位下げてくれ。」

　竜郎「了解。」
ココは、昨年森学が唯一落とした種目だ。
しかし、今年は１位通過を見ればわかるが、取る気できていると思われる。
ドリームとダストの組み合わせでないのが不思議だけれど、それでも１位とは流石だ。
　大輔「後は、チームダブルか・・・」
森学のチームは２位、俺達のチームが１１位。
ココも一度負ける必要がありそうだけど、放っておいてもそのうち下がるだろう。
時間が迫ってきた。
予定どおり、チームダブルの順位は１２位に下がった。
これでココは、決勝まで当たらない。
他も順位が少し下がって、調整の必要無く、全てが理想どおりに確定した。
確定した順位は次のとおり。
チームは、１位はドリームダスト、２位は俺達のゴッドブレス、ブライトスターが６位だから、準決勝で激突する。
シングルは、ドリームが１位、ダストが３位、レッドストーンが６位に下げて、マイヒメも９位に下げていた。
ダブルは、ドリームとカズミンのペアが１位、ダストとトゥデイのペアが１０位。
ビッグゴッドとレッドストーンのペアが３位で、サウスドラゴンとマイヒメのペアが１３位だ。
そしてチームダブルは、ドリームカズミンとトゥデイダストのチームが２位、ビーナスとドラゴンブレスのチームが１２位で別ブロック。
概ね合格点。
しかし、ドリームは流石だ。
チームダブル以外は全て１位に入っているし、チームダブルでも２位。
確か後藤夢ちゃんだっけか。
俺達より年下なんだよな。
俺達はなんとなく、去年のテレビ中継の録画ＤＶＤを見てから、みんなで雑魚寝した。

今年のゲームイベントは、２７日にテストバトル、２８日からイベントにあわせて大会が始まり３１日に終わる。
そして４日の木曜日に、ゲーム情報番組内で、全ての決勝が行われる。
会場までは１時間半くらいでつくから、俺達は自宅から通う事になる。
２７日、俺達全員、テストバトル会場となる、バトルグリード株式会社の本社に来ていた。
対戦が多かったり、複数の種目に出ていたりするから、調整が難しくて待ち時間が長い。
で、俺は待合室で待っているのだけれど・・・
ダストの知里ちゃんだ。
どうやら、相方のドリーム夢ちゃんは、対戦中らしくいない。
　知里「待ってるの面倒だよぉ～」
　今日子「はっはっは、知里はまだいいじゃないか！私なんか２つしかでないんだから、より多い待ち時間があるのだよ！」
知里ちゃんと一緒にいる子の声が大きくて、待合室が少し五月蠅く感じる。
　竜郎「テンション高い子だな。知里ちゃんと一緒にいる子。」
　大輔「そんな子は、どうでもいい。」
　吐息「でも、知里ちゃんとはお友達になりたいんでしょ。」
まあ、ぶっちゃけ、今すぐ知里ちゃんに話しかけて、お友達になりたいと思っているんだけどね。
恥ずかしくてそんな事はできない。
　大輔「はぁ～・・・」

俺は大きくため息をついた。
すると知里ちゃんが、こちらに笑顔を向けてくれた。
　知里「待ってると疲れちゃうよねぇ～」
・・・
え？俺に話しかけてくれてる？
ドキドキ・・・
　大輔「ああ、うん。もう退屈すぎて、欠伸がでちゃうね。」
あれ？俺ちゃんと喋れてるかな？
竜郎が俺を肘でつつきながら、何か言っているみたいだけど、何を言ってるかなんて聞こえない。
　知里「去年、チームダブルで対戦した事、あったよねぇ～」
おお！覚えてくれていた？
　大輔「うん。はっきり言って完敗だったけどね。」
　知里「そんな事ないよぉ～。あの裏技をまだ公開してなかったからだよぉ～。裏技が無かったら、きっと良い勝負だったよぉ～」
・・・
う～ん、いいなぁ知里ちゃん。
　吐息「大輔？生きてる？」
おっとやべ、つい見とれちゃった。
　大輔「そんな事はないよ。でも、今回は、去年より良い勝負できると思うから。」
俺達は１年練習し、研究したんだ。
勝てないまでも、良い勝負できる自信はあった。
　今日子「知里？知り合いなのか？私はあの人知らないよ。えー！私去年寝てたっけ？会場には来てたよね？来てたよね？」
俺の記憶には、この五月蠅い人の記憶は無い。
　知里「いたけど寝てたぁ～のかも。」
　竜郎「へぇ～、去年もいたんだ？あ、俺もいたんだけど、今年も良い勝負しようぜ。」
なんだ竜郎、その五月蠅い女が良いのか？
　今日子「なんだチミは？ん？そっ！その目は！私をナンパしてる？ええ！そうなの？そうなのね？！やっぱり美しさって罪なのね！」
　竜郎「そう、罪なんだよ。だからまずはお友達から、お願いします。」
竜郎よ。
なんだそのベタなお願いは。
もう好きにしてくれ。
　吐息「あ、でも、私も森学の人とは友達になりたいかも。」
ま、まあ俺も、森学って言うか、知里ちゃんと夢ちゃんとは友達になりたいけどね。
　今日子「よーっし！よく言った。友達だろうとマブダチだろうともってけ泥棒コン畜生だ！さあ、呼ぶのじゃ。私の名前は今日子だ！」
・・・偉そうにふんぞりかえってるし。
　竜郎「おお今日子よ。俺の事も竜郎とののしってくれ！」
いいのか？
ほんとうにそれでいいのか竜郎よ。
　今日子「うらぁ！竜郎！なんだ？殴ってほしいのか？それとも蹴ってほしいのか？ぐはははは！！愉快愉快！！」
　知里「今日子、そろそろ私達の出番みたいだよぉ～。えっと・・・」
　大輔「川神大輔１８歳です。ヨロシク！」
俺は右手を出した。

　知里「ヨロシクだよぉ～」
握手してくれた。
うう、もう負けても良いかも。
ってか死んでも？
　吐息「はぁ～大輔がこんな奴だったとは。知ってたけどさ。」
少しだけ吐息がすねていた。
　知里「じゃあまたぁ～」
　大輔「うん。またね。」
　今日子「竜郎、ゲーム内でもいじめてあげるからね。期待しててね。ばははーい！」
　竜郎「期待してるよー！」
って、ゲームで負けるじゃんか。
　吐息「じゃあねー！」
こうして俺達は友達になった。
って、本当に友達と言えるかは、これからのがんばりしだいかね。
この後、結局みんな、問題なくテストバトルをクリアした。
全体では、３組ほど負けたようだけど、審査に引っかかって出場を取り消される組はなかった。
こうして俺の幸せな、テストバトルの日は終わった。

大会開始

大会初日、まずはシングル戦だ。
ドリーム夢ちゃんは流石の圧勝を見せる。
　大輔「あのコントローラーさばきは、もはや芸術だよな。」
完璧に機体を、体の一部にしているような動き。
指さばきなんて見えない。
このドリームに勝てる人なんて、皆無じゃないだろうか。
でも、勝ってる人もいるんだよな。
それがダストの知里ちゃんだ。
わざと負けてるとかって人もいるけど、俺にはそうは思えない。
知里ちゃんもかなりのコントローラーさばきだし、それに戦い方が読めないからな。
　乙女「次は私の番だよぉ～」
少し知里ちゃんにしゃべり方が似てるが、見た目は全く違う乙女。
見た目は完全に知里ちゃんのが年上に見える。
乙女が子供に見えるってだけかもしれないけど。
　大輔「ココを勝ったらドリームとやれるんだ。勝ってこいよ。」
乙女はどちらかというと接近戦が得意だ。
フィールドにも影響をうけやすいからポカも多いけど、近接攻撃力だけなら我がサークルのナンバー２。
フィールドは森に決定した。
これはついてる。
森か街、この二つは、乙女の得意マップだ。
機体マイヒメの名のとおり、舞うように木々を抜けてゆく。
敵機体は中長距離を得意とする、スタンダードなタイプ。
　乙女「にがさないのぉ～」
既にビーム弾が届く距離。
木々の間をぬって撃つマイヒメのビーム弾は、面白いように敵に命中する。
向こうからの追尾ミサイルは、このマップでは使いづらい。
木に当たってこちらまで届かない。
ビーム砲を何発かあてられたが、反撃はそれだけだった。
　乙女「やったよぉ～！いぇ～い！」
乙女が笑顔で俺達にピースした。
　大輔「流石乙女、森だったら、ドリームともかなりやれるかもな。」
　沙羅「まあ、少なくとも、良い勝負はできるでしょうね。」
大型モニタの前では、森学の連中が観戦していたようだ。
　大輔「観てたみたいだな。」
　吐息「うん。でも余裕そうなのさ。」
夢ちゃんはあまり相手にしていないようで、もう卒業している元部長とじゃれ合っていた。
う、うらやましくなんかないぞぉ～！！
　大輔「シクシク・・・」
最終日のチームでは、絶対にブライトスターには負けないぞ。
俺は堅く誓った。
しばらくして、知里ちゃんのダストの出撃。
こちらもあっさりと勝利していた。

流石に強い。
操作が早いってよりも、動きが読めない感じ。
とにかく敵にしたら怖い。
　沙羅「じゃあ、次は私ね。」
次は沙羅のレッドストーンが出撃だ。
俺達は、大型モニタ前から、操作席辺りに移動する。
知里ちゃん達とすれ違った。
　大輔「ういっす！」
俺は極めて自然に声をかけた。
　知里「こんにちわぁ～」
　夢「誰？」
　今日子「昨日私の舎弟になった、竜郎のお友達みたいだよ。って、おっす竜郎！」
　竜郎「お、おっす。って、俺は舎弟だったんだ？」
なんか、竜郎のイメージが、ドンドン悪くなってくるな。
結構もてるし、ツラも良いのに。
　吐息「今日はお手柔らかに頼むのさ。」
　達也「うん。お互い全力で楽しみましょう。」
この人が元部長か。
ゲームがうまいようには見えないんだけど、なんだか強そうなんだよな。
　大輔「じゃあ、また後で。」
　知里「うん。じゃあねぇ～」
俺達は、さっきまで森学の人たちがいた場所にきた。
沙羅だけが、席についてコントローラーを握る。
　大輔「まあ、言う事はないけど。頑張れ。」
　沙羅「ええ。」
沙羅は見た目は美人系で、めがねをかけている。
俺達のサークル内では、頭脳的存在だ。
作戦の考案は沙羅が中心。
ゲームも一番安定して強く、我がサークルのエース。
あっさりと勝利した。
　大輔「おつかれ。街だったけど楽勝だったな。」
沙羅のレッドストーンは、中長距離を得意とするドリームと同じ系統だ。
　沙羅「森よりはマシだしね。」
　吐息「街は障害物が多いけど、直線で見通しがいい場所が、結構あるのさ。」
まあそういう事だ。
人によっては、荒野の方が戦いにくいって人もいるからな。
マップはランダムで選ばれるけど、街になる確率が極めて高い。
他のマップは気まぐれ程度にあるだけだ。
沙羅が席を立つと、俺達はその場所を空けた。
一回戦の残り試合が終わるまで、俺達も大型モニタ前で観戦していたが、少し離れた所にいる森学の人達と話す事は無かった。
少し残念。
で、二回戦。
まずは夢ちゃんのドリームに、我がサークルのマイヒメが挑む。
森学の人達がいる場所からは少し離れているので、少しくらいの声しか聞こえてこない。
　乙女「よし、やるぞぉ～」

乙女が気合いを入れて席についた。
　沙羅「まあ、マップしだいね。」
　乙女「森こい森こい森こい！」
マップが決まる。
・・・
　大輔「地下洞窟？」
　沙羅「滅多に無いマップね。」
地下洞窟マップは、結構レアなマップだ。
１００戦しても、一度あるか無いか。
まあ、練習もそれほどできるマップではない。
　竜郎「乙女は珍しいマップをよく当てるな。」
そういえば、乙女は街以外で戦ってる事をよく見る。
そういう星の元に生まれたのかね。
とにかく、このマップは、判定になる事が多いマップ。
特に中長距離機体と近接格闘機体だと、その可能性は大きい。
　大輔「逃げ回って、判定を狙うか？」
　沙羅「それだと不利ね。」
　乙女「真っ向勝負あるのみぃ～！」
　竜郎「だな。」
　吐息「乙女は、真っ向勝負が取り柄なのさ。」
マップに、マイヒメが表示された。
カウントダウンが始まる。
そして、ゲームがスタートした。
マイヒメはとにかく最短ルートでドリームを目指す。
ドリームも同じように向こうから向かってくる。
どちらも真っ向勝負だ。
すぐにドリームを捕らえた。
それは、向こうもこちらを捕らえたのと同じ。
ビーム砲と追尾ミサイルがとんでくる。
　乙女「その程度で、私の行進は止められないよぉ～」
マイヒメは全てをうまくかわしながらドリームに近づく。
　大輔「近距離攻撃に切り替わる！」
ドリームの早い攻撃に、マイヒメの対応が遅れる。
　乙女「はやいなぁ～」
ドリームのビーム弾がマイヒメを捕らえた。
それでもマイヒメは更に接近。
すでにビームジュルを両手に装備していた。
近接格闘で勝負を挑む。
ドリームがロケット弾を発射して、武器をビームソードに切り替えた。
マイヒメがロケット弾を受け流すようにかわす。
しかしすぐにビームソードが斬りつけてくる。
こちらは盾を持っていない。
乙女は回避に全神経を注いでいるから、防御の二文字は無い。
かわした。
流石にマイヒメ。
すかさず攻撃する。

簡単に防がれる。
やはりドリームは強い。
近接格闘でも勝てる気がしない。
機体能力なら、近接格闘ならこちらの方が有利なはずなのに。
こちらの攻撃は、全て防がれる。
マイヒメの攻撃が当たらないと言うことは、竜郎以外の近接攻撃は全て当たらないだろう。
ダメだ。
だんだんとかわしきれない攻撃を、ドリームが繰り出してくる。
ビームバルカンでうまく牽制されている。
　乙女「ああ～ん！強いよぉ～」
爆発音と共に、ゲームは終了した。
ドリームには、ほとんどダメージを与えられなかった。
　沙羅「森じゃないと、勝負にならないわね。」
力の差は、まだまだ有りそうだった。
間１ゲームをはさんで、今度はダストとレッドストーンの戦いだ。
マップは普通に街。
我がサークルのエースと、知里ちゃんか。
おそらくは良い勝負になるだろう。
街のマップに機体が表示され、間もなくゲームがスタートした。
沙羅はスタンダードな戦いをするから、まずは離れた位置で様子をうかがう。
ダストはノロノロとマップを動いていた。
　沙羅「読めないわね。」
　竜郎「でもこのままじゃ、勝負にならないだろ？」
　吐息「どこかで視界に入れるのさ。」
レッドストーンは、見通しの良さそうな場所で、ダストをロックオンした。
追尾ミサイルとビーム砲の連携。
すると追尾ミサイルを追尾ミサイルで迎撃してきた。
この技は、今ではすっかり広まっているが、あのブライトスターの技だ。
ただ、追尾ミサイルをその分必要とするので、あまり使う人はいない。
ダストは尚もノロノロと近づいてくる。
　沙羅「だったらビーム砲をメインにするまで。」
追尾ミサイルを撃ってから、ビーム砲もロックオンして放つ。
今度は急旋回して建物の影に入られ、あっさりかわされた。
　沙羅「一旦引く。」
沙羅は見通しのいい場所から離れる。
いやその一瞬の瞬間、背を向けたほんのわずかな時間に、狙い澄ましたビーム砲の連射。
　沙羅「ビーム砲を余分に積んでる？」
知里ちゃんの機体は、おそらく近中距離を捨てた、長距離の機体？
それなのに接近してきていたのか？
全てがレッドストーンに命中。
機体の損傷が激しい。
　竜郎「被弾した場所が悪い、移動速度制限がかかるぞ。」
　沙羅「まだまだ！ブースト使えばオッケー！」
だけどブーストを使った移動は燃費が悪い。
レッドストーンをすぐに反転させて、ダストに向かう。
接近戦にするつもりだ。

ダストは逃げる。
スピードは速い。
しかし追いつめられた沙羅は強い。
集中力を極限まで高めた沙羅は、ダストとの距離を確実に詰める。
知里ちゃんも諦めたのか、近接格闘戦に応じてきた。
早く決着をつけないと、こちらの燃料がもたない。
さきほどから使い続けているブーストのせいだ。
しかし接近してしまえば、燃料消費はほとんどない。
今相手に再び逃げられたら、レッドストーンの負けだ。
もちろんそんな隙は、沙羅なら与えないだろうけど。
燃料が無くなると同時に、ダストを破壊していた。
　大輔「おお！やったじゃん沙羅！」
　沙羅「ふぅ～ギリギリだったけどね。判断が１秒遅れてたら負けてるよ。」
　竜郎「だな。」
勝負は勝ったけど、でもやはり知里ちゃんも凄かった。
毎回いろんな装備で、いろんな戦いをしてくる。
今回はたまたま失敗しただけかもしれない。
俺はなんとなく気になった。
それに話す口実もできたから、俺は知里ちゃんのところに向かった。
　大輔「ちょっと話してくる。」
　沙羅「はいはい。」
大型モニタの前で、森学の人達が集まっていた。
　大輔「ども！」
俺は平静を装って、知里ちゃんに話しかけた。
　知里「負けちゃったよぉ～。レッドストーン強いねぇ～」
見たところ、負けたショックはないようだ。
　大輔「ああ、あいつはうちのエースだからね。」
　知里「そうなんだぁ～。反応早かったもんなぁ～」
もとい、少し悔しそうだ。
　大輔「反応ってか、奴の場合判断するのが早いんだけどね。」
　知里「４連ビーム砲で、エンジン確実に破壊する予定だったのにぃ～射線が０．１度ずれたよぉ～」
なんと、あそこで知里ちゃんの計算がくるっていたのか。
あれでもかなりやられたと思っていたんだけど。
　夢「それに、レッドストーンの近接格闘のデータが無かったからね。」
　達也「チリちゃんは、データが無いとたまにポカするからな。」
　大輔「そうなんだ。って、挨拶してなかった。俺、川神大輔って言います。ヨロシク。」
　達也「ああ、チリちゃんから聞いてるよ。俺と同じ歳だっけ？星崎達也です。で、こっちが後藤夢。」
　大輔「え、ああ、ヨロシクね。」
　夢「うん。」
少し夢ちゃんは俯いていた。
うわぁ～、夢ちゃんもかわいいなぁ～
　達也「あげんぞ？」
達也君が、腕を夢ちゃんに回して、抱き寄せていた。
いい、実にいいなぁ～
って、知里ちゃんと話してたんだった。

　大輔「でも、よくあんな戦い方できるね。」
　知里「んー。データが有れば、いろいろ考えるの楽しいからぁ～」
なるほどなぁ。
知里ちゃんは、勝つ事もまああれだけど、それ以上に楽しんでやっているんだな。
夢ちゃんは勝つ事が楽しいって感じか。
　大輔「なるほど。じゃあ俺はみんなの所に戻るよ。」
　知里「うん、またねぇ～」
　達也「ああそうだ、これ、渡しておくよ。」
差し出されたのは、名刺。
サークル☆ドリームダストのだ。
連絡先やホームページアドレスが書かれていた。
　大輔「あ、ありがとう。俺も有ればいいんだけど。ゴッドブレスってサークル作ってるから。」
　達也「そうなんだ。覚えておくよ。ああ、チリちゃんも名刺わたしといたら？」
　知里「ええ？私、ドリームダストの名刺なんてないよぉ～」
　達也「いや、個人的にあったでしょ？」
なんだろう？
　知里「え、あ、うん。」
知里ちゃんが少し照れたように、鞄から名刺を取り出した。
　知里「はい。」
　大輔「ありがと。」
受け取った名刺には、知里ちゃんの携帯番号とメアドが書かれてあった。
・・・
　達也「じゃあ。」
そう言うと、森学の人達は去っていった。
おい、どうするよ？
電話番号書かれてるよ。
メアドも有るよ。
俺は早速、番号とメアドを登録して、メールを送った。
俺の携帯番号とメアドを書いて。
で、この後のゲームは、ドリームとレッドストーン共に、無事勝ち進んだ。
来週木曜日には、エース対決だ。
今から楽しみだった。

知里ちゃんのリベンジ

大会２日目、今日はダブルの大会だ。
夢ちゃんのペアは、あっさりと一回戦を勝っていた。
それにはたいして驚きもないのだけれど、ペアを組んでいるカズミンという機体の動きに驚いた。
強いとか早いとか、そんな事は感じないけど、とにかくうまい。
なるほど１位通過してきた事に、大いに納得した。
で、竜郎と乙女のペアの登場だ。
相手はどこかで見た事が有ると思っていたけど、元森学ゲーム部部長の田中さん達のペアだった。
機体名は、ビューティフルベルとマーチ。
去年ドリームとスターのペアが負けている相手。
　大輔「油断できないぞ。」
　竜郎「まあ、予選４位だからな。普通に見ても俺達より強い。」
　乙女「切り刻むよぉ～」
この二人のペア、正直もったいない組み合わせ。
竜郎は、我がサークルナンバー１の近接攻撃力を誇るし、ナンバー２は乙女だ。
近接バトルなら、おそらく全国ナンパー１ペアになれるかもしれない。
でも、如何せん勝手な二人だ。
チームワークが全くなってないのだ。
ゲームがスタートした。
向こうはスタンダードな戦い方、ビューティフルベルが近づいてきて、それをマーチがサポート。
こっちはただ突撃あるのみ。
　竜郎「うぉぉ！！」
　乙女「邪魔だよ。」
マーチの攻撃が、サウスドラゴンをとらえる。
　竜郎「ちょ、こっちくんなよ！」
　乙女「そっちが邪魔したんだよぉ～！」
全く、全然成長していない二人だ。
それでも一応予選通過した二人だ。
運が良ければ良い勝負するだろう。
二人がかりでビューティフルベルを攻撃する。
ココまで完全に負けていたけど、この状態になれば勝てる可能性が見えてくる。
　大輔「ん？」
　沙羅「マーチが、マイヒメを放置してきたね。」
　吐息「弱点がばれちゃってるね。」
竜郎は、攻撃は強いけど、守りが全くなってない。
それを今二人がかりで攻撃されていた。
　乙女「生き残ってよぉ～」
　竜郎「しるか！俺は攻撃あるのみ！」
直後爆発音が響いた。
惜しかったな・・・
まあ、この微妙なタイミングの差で、いつも勝つか負けるかなんだけど。
ほんの少し、やられるのが早かったようだ。
　乙女「また竜郎のせいで負けたよ。」
　竜郎「ば、ばか。あと１秒粘れたら勝ってた。むしろお前が俺くらい攻撃つよけりゃ勝ってた。」

まあ、そうなんだけど、少しは守ろうよ。
さて、次は俺と沙羅の出番だ。
場所はこのままなので、席を替わる。
　大輔「負けた席かよ。」
　沙羅「実力あるから問題ないよ。」
沙羅は冷めてるというか、落ち着いてますなぁ。
俺は苦笑いしてから、機体の登録を済ませた。
戦術はスタンダードだけど、必ずしもスタンダードではない。
俺の機体は近中距離使用の万能型、レッドストーンは中長距離の万能支援型。
まあ、臨機応変どんな状況でも対応できるペアだ。
ゲームが始まる。
敵は１４位通過だ。
相手にならなかった。
俺達の圧勝だった。
その後、ドリームとカズミンのペアは決勝まで勝ち進んだ。
竜郎が負けたビューティフルベルとマーチのペアも、準決勝で簡単に負けていた。
流石に強い。
もしかしたら、ドリームとダストのペアよりも強いかもしれないと思った。
で、俺達の準決勝の相手は、知里ちゃんのダストと、あの五月蠅い今日子ちゃんのトゥデイのペア。
さっき大型モニタで戦いをみていたけど、何故勝ってるのかわからない相手だ。
知里ちゃんのダストは、万能型のスピード重視の機体で、今日子ちゃんのトゥデイは、重装備の鈍重なパワー機。
こんな機体を使う人は見たことがない。
だいたいこれだけの装備を持っていても、動きが遅すぎては使い物にならないと思うんだけど。
　大輔「最初は様子を見よう。で、基本はトゥデイを遠くから削る感じだな。」
　沙羅「私がダストを押さえるから、大輔が削ってね。」
　大輔「オーライ！」
マップが表示される。
街の中に、俺達の機体が映し出される。
カウントダウン。
　大輔「ゴー！」
スタートと同時に、俺は左から進む。
知里ちゃんのダストからは離れる感じだ。
右からはレッドストーン。
　大輔「ダストが正面からまっすぐ来たぞ。」
　沙羅「ふん。後ろにつくよ。」
トゥデイはその場に待機しているような感じ。
そこに俺が左から接近。
その後ろを狙うようにダスト。
さらにその後ろをレッドストーンと言った感じだ。
　沙羅「ちっ！二人でダストやるよ。」
　大輔「そうだな。旋回はしたくないけど、これ以上トゥデイには近寄れない。」
　沙羅「仕方ないわね。」
俺は機体を旋回させる。
ダストからの攻撃が、容赦なく命中した。
　大輔「でもこれで、２対１だ。」

それでもダストが俺の方へと近づいてくる。
　沙羅「後ろががら空きよ。」
ダストの後ろから、沙羅がビーム砲を浴びせた。
それでもダストが接近してくる。
　大輔「こっちは近接でも問題ないよ。」
　沙羅「大輔、後ろ！」
なんと！動いていなかったトゥデイが近づいてきている。
ほとんど動いていないように見えるから、つい忘れてしまう。
右へ旋回する。
ダストからの攻撃が当たる。
　大輔「なんで２対１でやられてるんだよ。」
　沙羅「大輔は態勢を立て直して。私がダストを追う。」
ダストは俺を追いかけるのをやめて、右に旋回。
　沙羅「そこ！」
旋回直後のダストを狙う。
一発あったったか。
　沙羅「って、トゥデイが視界に入った？」
　今日子「待ってましたぁーーーー！！！」
向こうから、今日子の大きな声が聞こえてきた。
信じられない程のミサイルが画面に映る。
追尾ミサイル、ロケット弾、ビーム砲にビーム弾、全てが沙羅のレッドストーンをめがけてとんできた。
　沙羅「きゃっ！」
そのほとんどがレッドストーンに命中した。
　大輔「何故そんなに当たる？」
　沙羅「数が多すぎて、画面が揺れる。」
処理が遅れるのか。
次から次ぎへと新しい戦い方を考えるもんだな。
俺は感心した。
直後、いつの間にか急旋回して戻ってきていたダストに、レッドストーンは斬りつけられて破壊されていた。
　大輔「ふぅ～・・・つええ・・・」
　沙羅「罠にはめられたね。」
沙羅にとっては、シングルの仮をかえされたってわけか。
って、沙羅は知里ちゃんに勝ったんだから、俺があの五月蠅い女に負けたのか？
信じたくねぇーーーー！！
こうして２日目は終わった。

敵は森学だけにあらず

大会３日目は、チームダブルだ。
もっともレベルの高い戦いが見られる、はず。
昨日夜、知里ちゃんと電話で２０分くらい喋った。
その時の話によれば、ドリームカズミンは、ドリームダストよりも強いらしい。
もちろんそんな対決は絶対に実現しないわけだけど。
今日は、俺達のバトルが先に始まる。
森学が唯一１位通過していない種目だから。
俺達はまず、５位通過のチームと対戦する。
夏の大会で、俺達が決勝で負けたチームとの再戦だ。
はっきり言って俺達のミスで負けたから、今日はリベンジする気満々だ。
敵の機体は、万能型と万能中長距離型で、勝率が一番安定する組み合わせ。
俺達は、俺と乙女のビーナス、竜郎と吐息のドラゴンブレス。
万能近距離型が二機だ。
勝率に若干むらがあるし、エース沙羅が入っていないけど、これはこれで強い。
沙羅はどちらかと言うと、シングル機が得意だし。
　竜郎「まずはリベンジだぜ！」
　大輔「吐息と組むと、お前強いからな。」
吐息は守りがとにかく鉄壁だ。
馬鹿みたいに攻撃しかしない竜郎と組めば、お互いの欠点を補い合える。
だた、武装が難しいから本当は乙女と組む方が強いかな？
人間的相性が良ければだけど。
ゲームがスタートした。
敵機は離れた位置で様子をみている。
こっちはとにかく接近だ。
近接すれば負ける気はしない。
俺達の機体の後ろを、ドラゴンブレスがついてくる。
攻撃は俺達が一手に引き受ける。
離れた位置からの攻撃なんて、乙女にかかれば簡単にかわせるから。
敵の一機が、近接に切り替えてきた。
こちらもあわせて武器をビームソード二本差し。
両手にビームソード、防御は無しだ。
ただ、竜郎のサウスドラゴンと違うところは、ちゃんと回避する事。
乙女が華麗な回避に集中すれば、そうそう負ける気がしない。
おそらくこれだけなら、夢ちゃんにも負けない。
　大輔「回転！」
乙女が機体をスピン回転させて、敵に近づく。
広げたビームソードが敵機を切り刻む。
離れた位置から追尾ミサイルがとんできたが、ドラゴンブレスが巨大盾で受け止める。
ダメージは受けるが、ほんの少しだ。
その間に、ビーナスは目の前の敵を切り刻む。
　大輔「支援機なんて、支援できなけりゃ無駄なんだよね。」
　吐息「とっとと、終わらせるのさ。」
　竜郎「俺つまんねぇ。」

　乙女「旋風斬！！」
なんか勝手に技名付けてるし。
楽勝とはいかなかったけど、無難に初戦を勝利した。
森学のチームは、圧倒的な強さで勝ち上がっていた。
俺達は２戦目もそこそこ苦労する。
で、準決勝。
相手は予選１位通過のチーム。
少しヲタク系の大人達のチームだ。
見た事はないけど、かなり強い事は間違いない。
予選で唯一森学を上回る成績を収めているんだから。
　沙羅「あの人達、秋葉のバトルグリード直営のゲーセンの常連よ。」
　竜郎「ほう。あの店のメンバーか。」
秋葉原系のゲーマーは、概ね強い人達の集まりだ。
まあ偶にはしょっぱいのもいるけど、この人達はそんな事はありえない。
登録画面、相手の機体を確認。
細かい武装は見えないが、万能型が二機。
破壊力は無いけど、対応力は一番の組み合わせ。
作戦もおそらく豊富で、プレイヤの能力もそのまま勝敗を左右する。
　大輔「森学と同じくらい強いと考えて間違いなさそうだな。」
　沙羅「自分たちの形に持ち込めば勝てる。」
後ろから沙羅が声をかけてくるが、裏を返せば、こちらの形に持ち込めなければ勝てないって事だ。
夏の大会準優勝チームとして、出来る限り抵抗してやるさ。
ゲームがスタートした。
相手は両方長距離戦の形をとってきた。
まあ、こちらが近接格闘が得意なのは、見ればわかるからな。
そして、それで戦っていれば、こちらに勝ち目はない。
　吐息「移動速度では勝てないのさ。」
　竜郎「盾なんてすてちまえ。」
　大輔「そんな事したら死ぬぞ？」
　乙女「なんとか近づくよぉ。」
まあわかってはいるが、作戦はそれしかない。
後ろからドラゴンブレスがついてくる。
これが俺達の戦い方だ。
流石に二機からの攻撃は全てかわすのはきつい。
すこしずつ削られる。
　大輔「この組み合わせの欠点を知ったな。」
　沙羅「まあ、わかっていた事だけどね。」
そういう事。
わかっていたから、対応策もあるわけで。
　乙女「そろそろ行くよぉ～！」
乙女はそういうと、ビーナスのスピードを上げた。
ブーストを利用した、瞬間のスピードアップだ。
多用すると、燃料がきつくなるから使い続けるのはタブー。
でも、接近できればやれる自信はある。
　大輔「吐息も来い！」
　吐息「オッケーなのさ。」

敵機と一気に距離を詰めた。
俺はすぐに、ビームソードの二刀流に切り替える。
スピンを利用して旋風斬！
乙女命名。
しかしかわされた。
読まれてたか。
　大輔「乙女食らいつけ。」
　乙女「りょーかいぃ！」
って、すぐに反撃してきた。
　大輔「近接格闘もつええ。」
　乙女「慎重にいくよ。」
　大輔「ダメだ。逃げられたら終わりだ。」
ココは俺と敵のガチンコバトル。
　吐息「もう一機は任せるのだ。」
機体の右側を敵に向ける。
右側で盾を構え、左手にはビーム銃。
些細な援護だけど、結構助かる。
ちなみに竜郎と俺は左利きだから、左に武器を持つ事が多い。
ってかやりやすい。
さて、この状況なら、俺が目の前の機体を落とせれば勝てる。
しかし伊達に万能機に乗っていない。
近接格闘戦もなれてやがる。
しかもこちらはノーガード。
全てかわすしか無い。
敵はビーム弾をガードで受けながら、こちらにも攻撃してくる。
二人のコンビネーションもなかなかだ。
ダメだ。
このままだと僅差で負ける。
　沙羅「どこかでやるしかないわね。」
　大輔「だな。」
燃料もやばいし、そろそろ勝負だ。
　大輔「乙女、いくぞ。」
　乙女「わかったぁ～」
俺はビームバルカンを撃った。
当たっても対してダメージはないけど、一瞬くらいは動きを止められる。
もしくはかわしてくれればラッキー。
後ろに引いてかわしてきた。
　乙女「旋風斬！」
だから格好悪くね？
前へ加速すると、一気に機体を右に向ける。
スピンして機体が回転。
少し弱いか？
届け！
右が当たった。
後は左が当たれば俺達の勝ちだ！
・・・

かわされた。
後は回転後の隙に攻撃されて負けた。
　大輔「負けたか。」
　乙女「相手の方が、一枚上手だったねぇ～」
　大輔「ああ。」
ドリームダスト以外にも、力を付けてる相手がいるって事だな。
俺はコントローラーをおいて立ち上がった。
その後の準決勝第二戦は、森学ゲーム部が順当に勝ち上がっていた。

ライバル一進一退

大会４日目は、人気のドリームダストが出てくる。
そして今日は日曜日。
いやが上にも盛り上がる。
１位通過のドリームダストが、初戦から登場した。
相手は大人の男女。
見た目恋人か夫婦っぽいから、コンビネーションは良さそうだ。
しかし、ドリームダストの敵ではなかった。
開始３０秒程度で、ものの見事にあっさり破壊されていた。
部屋のテレビで見ているより、大型モニタで観戦してると、その強さが伝わってくる。
やはりギャラリーが多いのも、臨場感というか迫力を増幅させているように感じた。
今日は警備員も昨日の倍になっている。
関係者の俺達でさえ、知里ちゃんとかには近づけなかった。
一回戦の６戦目、先に対戦するであろうブライトスターが登場だ。
去年の優勝機で、準決勝で俺達が負けた機体。
流石にドリームダストも、今では数回負けてはいるが、最初に土をつけた機体でもある。
このチームの一番面白いのが、戦闘中状況に応じて、攻撃系と移動系を交代するところ。
よくもまあできるものだ。
世間では恋人同士だとか言われているけど、なんにしても息があっているからこそできる芸当だ。
さて、どんな戦いをするのだろうか。
・・・
いたって普通の戦いで、普通に接戦を制して勝っていた。
あまり強く見えなかったのは、俺達が強くなったからだろうか？
まあまだ対戦する迄には一戦あるから、もう一度後で見ればいいか。
こうして一回戦の最終戦、俺達の出番が来た。
　大輔「さあ、絶対勝つぞ。」
　吐息「まあまあ、リラックスなのさ。」
俺と吐息は席についた。
　沙羅「まああんた達なら、大丈夫でしょ。」
　乙女「伊達に予選２位じゃないしねぇ～」
　竜郎「何故お前達が強いのか、よくわからんがな。」
竜郎の言うとおり、俺は誰と組むより吐息が一番息が合う。
沙羅はまあ、単独が得意だからいいとしても、乙女なんかの方が理屈では良いはずだ。
てか、俺と組むより、竜郎と組んだ方が、よっぽど欠点を補い合える。
理屈ではないって事なんだろうけどね。
登録が終わって、機体が表示される。
敵は、ドリームダストやブライトスターと同じ、中長距離機だ。
こちらは、近接格闘と長距離の得意な特殊機。
離れるか、超接近するか。
更に他と違うのは、ガードではなく盾を持っているところ。
俺達の機体は、どちらかというと反主流。
これは、ドリームダストへの挑戦と反感だ。
ゲームがスタートした。
序盤は様子見だ。

相手の出方を見てから考える。
向こうも同じ事を考えているようだ。
　大輔「どうする？」
　吐息「焦る必要ないのさ。残り３０秒が勝負なのさ。」
俺達の戦術は、残り３０秒に力を集中する事。
まあ別に、それまでに動くなら動いても良いけど、３０秒有れば勝てるって事だ。
離れた位置からの攻撃。
当たる訳がない。
しかしこちらは、中長距離などど中途半馬な鍛え方はしていない。
競馬で言えば、２４００ｍから３２００ｍが得意な馬ではなく、４０００ｍが得意な馬なのだ。
様子を見るならそれでも良いが、少しずつ削るよ。
　大輔「そろそろだな。」
　吐息「まあ、我慢できなさそうなのさ。」
まだ１分しか経っていないのに、敵は戦術を変えて近づいてきた。
それでもおそらく中距離狙いか。
でも、向こうから近づく時に、こちらも近づけば、一気に距離は詰められるわけで。
　吐息「ゴー！」
盾を構えてとにかく前進。
距離は中距離から近距離へと一気に詰まる。
慌てて敵が旋回する。
　大輔「馬鹿が！」
いくら近距離が不得手でも、後ろからなら関係ない。
ロックオンせずにビーム砲。
　吐息「でも当たるのさ。」
後は離れる敵に、こちらもバックしつつビーム砲連射。
横道に逃げようとしたところで、追尾ミサイルで決めた。
　大輔「ま、まずは楽勝だったな。」
　吐息「予選通過者でも、弱いのいるのね。」
もしかしたら、誰かうまい人が代わりにやって、予選通過したんじゃないかと思った。

再び、ドリームダストが登場だ。
俺達の戦いなんか比較にならない数のギャラリーが、再び集まる。
しかし開始１分ですぐに勝利して、またすぐギャラリーはいなくなった。
ホント、ちょっと可愛いからって、みんな騒ぎすぎだよ。
・・・
まあ俺も、その中の一人なんだけどね。
　大輔「はぁ～」
　吐息「どうしたのさ？」
　大輔「人気あるなぁ～って思ってさ。」
　吐息「決勝が終われば、私のファンが全国に溢れるのさ。」
・・・
無いな・・・
しばらくして、再びブライトスターが現れた。
おそらくココで勝ってくれば、俺達と対戦する事になる。
相手は予選３位のチームだ。
力は互角だろう。

ブライトスターのバトルが始まった。
　大輔「ブライトスターって、いつも弱気な戦いに見えるよな。」
　吐息「あの達也って人の性格でしょ？」
　大輔「ふむ。」
戦いは、同型機同士の撃ち合い。
見ていて面白いものではない。
　吐息「あっ、仕掛けたのさ。」
ブライトスターが、接近を開始した。
　大輔「やばくね？」
先に動くリスク、何発かビーム砲をくらっていた。
現在その分だけ負けている。
お互い同じ機体なんだから、これはまずい。
腕も敵の方が上に感じる。
　大輔「あっ！」
　吐息「コントローラーを入れ替えたね。」
接近戦になった。
てか近接格闘戦。
ビームソードでの戦いも、敵が有利みたいだ。
そう思った次ぎの瞬間。
爆発音が鳴り響く。
　大輔「え？何が起こった？」
　沙羅「超近距離で、ロケット弾撃ったのね。」
後ろから沙羅が状況を報告してくれた。
　大輔「ロックオンできないでしょ？」
　沙羅「射線さえあえば、当たるわね。大輔の得な技でしょ。」
そうだ。
ロックオンしないで撃つのは、俺の得意技。
基本的には、相手の後ろをとった時に使う。
それも近中距離で使うのが基本なんだけどな。
話してる間に、追尾ミサイルも発射。
近距離での追尾？
　沙羅「これも射線が合えば可能ね。更に電磁波で微調整してるし。」
ブライトスターの、大逆転勝利だった。

次は俺達の二回戦。
相手はさほど強い相手ではない。
まあ、本戦に出てくる機体だから、弱いってわけではないけど、あくまで俺達にとってね。
ゲームが始まる。
相手は近中距離機で、俺達にとって実に相性が良い機体。
普通は、得意で無いところでくる相手は苦手なはずだけど、俺達は自分たちの得意なところにもっていくのが得意だから。
まずは俺達は様子見。
むこうは少しずつ距離を詰めようとする。
俺達は全速で離れる。
徐々に向こうもスピードを上げる。
スピードが速くなってくると、操作も難しくなる。

すると、微妙だけど隙ができる。
まだかなり距離が離れているけど、目視できれば俺達の得意距離だ。
ビーム砲で牽制しつつの追尾ミサイル。
ドリームダストの得意戦術を、超長距離で使う。
少しずつ削る。
すると更に相手は焦り、全速で近づこうとする。
　吐息「いくのさ。」
　大輔「オッケー！」
だから俺達も、一気の接近を試みる。
近距離戦だ。
外れても良いからビーム砲を一発撃って、ビームソードに持ち替えた。
近接格闘戦に持ち込んだ。
後は逃がさないだけ。
逃げるなら、後ろから集中砲火を浴びせるだけだ。
　大輔「さっきのためしていいか？」
　吐息「まあ、良いんじゃないの。」
俺は少しのダメージ覚悟で、機体を正面に向けてもらう。
　大輔「ココか！」
俺は正面に電磁波と、更に追尾ミサイルを発射した。
　吐息「ロケット弾じゃなくて？」
　大輔「あっ！近すぎたかな？」
・・・
爆発した。
どうやら、無事命中して、敵機を落とせたようだ。
とっさに吐息が機体を下げていたようにみえたけど。
　大輔「ナイス！」
　吐息「ナイスじゃないのさ。一緒に爆発に巻き込まれるところだったのさ。」
　沙羅「まあ、勝って良かったね。」
　乙女「そうそう、巻き込まれてもおそらく勝てたでしょ。」
　竜郎「楽勝楽勝。」
とりあえず、準決勝進出だ。
そして次は、去年の雪辱を果たすためのリターンマッチ。
ブライトスターが相手だ。
俺は武者震いした。

準決勝一戦目、ドリームダストはまたも楽勝。
こんな機体に、一体誰が勝ったんだよってくらい強い。
そんな機体に去年勝ったブライトスターに、今から俺達が挑む。
予選通過順位はこちらが上だけど、やたらと本番に強いんだよな。
モニタには、両機体が表示される。
ブライトスターは、俺達の機体を見ても、変更点はなさそうだ。
もちろん俺達も、変更点は無い。
フィールドが決定する。
　大輔「って、さばくぅ！！？？」
このところ街ばかりだったのに、この大一番で砂漠とはついていない。
目視回避は不可能。

狙いも定まらないから、追尾ミサイルが最大の威力を発揮する。
　吐息「何言ってるのさ。私達が圧倒的に有利なのさ。」
　沙羅「回避できないマップだけど、防御はできるよね。その盾なら。」
なるほど。
言われてみれば、有利かも。
　沙羅「私が相手の立場だったら、絶対に近接格闘にいくわね。」
だろうな。
撃ち合いだったら、盾持ちのこっちが、圧倒的に有利だもんな。
でも相手はブライトスターだ。
素直にくるだろうか？
機体が表示される。
考えている暇はもうない。
後はその場その場で判断だ。
　大輔「まあ、適当に頑張るぞ！」
　吐息「オーなのだ！」
ゲームがスタートした。
スタート直後、お互い少しだけ距離を詰める。
　大輔「一発！」
俺は追尾ミサイルの射程に入ると、すぐに敵方向に発射する。
ロックオンは必要ない。
なんせココは、視界以外の全ての障害は存在しない。
敵も同じタイミングで追尾を発射していたようで、数秒後のタイミングでこちらに追尾ミサイルが映る。
俺達は盾で防いだ。
微妙だけど、こちらのゲージが少し減る。
しかし、敵のゲージは変わらずだ。
　大輔「この中でかわした？」
　沙羅「いえ、迎撃したんでしょ。」
回避のタイミングは、目視出来る距離が近すぎる為に、まずあわせる事が不可能。
夢ちゃんあたりなら、もしかしたら回避してくるかもしれないけれど、普通はまず無理。
でも、迎撃なら、全く不可能ってわけではない。
　吐息「ビーム砲なのさ！」
おっと、集中しなくては。
ビーム砲が両脇を抜けてゆく。
ロックオンできないから、命中率は極めて低い。
俺はすぐに次の追尾ミサイルを発射する。
そして吐息が、自分の得意距離に距離をあける。
　大輔「って、もう次の攻撃かい！」
吐息がうまく盾で防ぐ。
ダメージって程ではないが、現状負けている事は確か。
　吐息「また外れた？」
　沙羅「迎撃？やるわね。」
連続で防がれるなんて。
　吐息「ビーム砲！」
　大輔「当たるかよ。」
狙いは俺達の移動方向やや前方、吐息は動きを止めて回避。

俺はすかさず追尾ミサイル発射。
動きが止まってる方が、狙いが定めやすいからな。
って、動きを止めて？
吐息は既に得意距離をキープ。
直後盾で防いだ。
　沙羅「またダメージをくらっていない？」
　吐息「何故当たらない？」
　竜郎「迎撃ったって、この砂漠じゃかなりきついだろ？」
確かに三度もかわされるなんて、何かある。
　大輔「って、またビーム砲かよ。」
　吐息「当たるわけないのさ。」
また前方へのビーム砲。
砂漠マップでも、ビームは比較的見えやすいから、注意していればかわせる事もあるし、そもそも当たりにくい。
一応進行を止めて、ビーム砲をかわす。
　大輔「今度こそ！」
って、これか？
俺は追尾ミサイルの発射をやめて、吐息が動き出してから発射する。
直後追尾ミサイルがとんでくる。
　大輔「吐息！」
　吐息「私を誰だと思ってるのさ。」
　沙羅「吐息でしょ。」
　竜郎「吐息じゃん。」
　乙女「吐息だよぉ～」
盾で追尾ミサイルを防いだ。
動きだしのタイミングで、盾で攻撃を防げるのは、おそらく吐息以外じゃほとんどいないはずだ。
再び動き出す。
敵ゲージが一気に減った。
当たった。
やはりそうだ。
ドリームダストが１０００連勝目前の頃、マップが砂漠になった。
追尾ミサイルの運任せの戦いが主流の中、ドリームダストは敵を追いつめてから、ビーム砲で牽制し動きを止め、追尾ミサイルを撃たせた。
決まった軌道を通る追尾ミサイルは、簡単にガードで防がれていた。
おそらくは、あれの応用。
ブライトスターは、追尾ミサイルを斬るのがうまい。
まずはビーム砲で牽制し、相手の動きを止める。
瞬時に武器をビームソードに変更。
その頃こちらでは、牽制してきたビーム砲を確実にかわす為に、動きを止める。
　吐息「またビーム砲！」
で、止まってる方が、ロックオンせずにミサイルを撃つにはやりやすいから、俺はこのタイミングで追尾ミサイルを撃つ。
今回は撃たないけど。
吐息が機体を動かした直後に、俺は追尾ミサイルを撃った。
このタイミングで撃てるのは、俺がロックオンせずに狙うのが得意だから。
もし止まったタイミングで撃った追尾ミサイルなら、タイミングも射線も読めるから、おそらくビー

ムソードで斬ったんだ。
最初の一発だけは、迎撃したんだろうけど。
　沙羅「吐息！」
　吐息「楽勝なのさ！」
動き出しにミサイルが来るから、防御は難しいけど、吐息ならいける。
相手のゲージがまた減った。
ロックオンせずに狙える俺と、どんな状況でも防御する吐息、俺達だったから看破できた戦術。
流石にブライトスターだ。
今回の砂漠は、圧倒的に俺達有利だったのに。
俺達はなんとかブライトスターを倒した。

ハイレベルの戦い

４日のバトルグリード全国大会決勝。
合計８組のうち、５組が森学ゲーム部、２組が俺達ゴッドブレス、１組が秋葉のゲーセン集団。
流石に森学は強いけど、次が俺達ってのは、ライバル視している俺達としては嬉しい。
しかし、これだけ差があると、やはり悔しいのも事実で。
　大輔「来年は、もう少し詰めたいなぁ～」
　吐息「来年言う前に、まずは目の前なのさ。」
　大輔「そうだな。」
俺と吐息は、待合室で待機していた。
テレビモニタが設置されていて、放送はココで見れる。
待合室はそれぞれ別で、知里ちゃん達とは会えない。
まあ、隣の部屋だから、押し掛けてもいいんだけど。
それに対戦の時には、会う事ができる。
　吐息「大輔、バトルの事、考えてないでしょ。」
　大輔「いや、ちゃんと考えてるって。」
やばいやばい、知里ちゃんの事を考えているのが、顔にでていたようだ。
やっぱり会えるのは嬉しい。
　吐息「沙羅がでてるよ。」
テレビモニタには沙羅が映っていた。
　アナ「さて、いよいよ決勝です。相手はあのドリームですが、勝算はありますか？」
　沙羅「・・・どうでしょう。まあ、胸をかりるつもりでいきます。」
　アナ「なんだかクールな方ですねぇー！ちっ！では、夢ちゃん、１年ぶりの参戦ですが、どうですかぁ～」
　大輔「あのアナ、舌打ちしてたぞ？」
　吐息「あれが売りなんだってさ。」
意味のわからない人が売れる時代なのかな？
　夢「えっと、まあ、勝ちます。」
　アナ「流石夢ちゃん～！自身がありそうです。」
　大輔「流石に自身ありか。」
　吐息「素人目に見ても、９：１で負けてるのさ。」
その１をつかんでほしいんだけどな。
　アナ「では、席についてください～」
アナウンサーってか、もはや司会者なアナが、着席を促す。
沙羅と夢ちゃんが席について、コントローラーを握った。
　アナ「では、登録しちゃってください。」
アナの言葉に、二人は操作を開始する。
すぐに機体が表示される。
お互い中長距離機だ。
フィールドが表示される。
おきまりの街だ。
俺と吐息は、黙ってモニタを見続ける。
機体が表示され、カウントダウンが開始。
そして今、ゲームがスタートした。
ドリームはいつもどおり、レッドストーンに直進してくる。

中長距離機なのに、平気で近寄ってくるのは、圧倒的強さを持つ者の自信だ。
沙羅は射程に入る直前に左へとんで、追尾ミサイルを発射。
右に体を回転させて、バック。
ドリームは飛んでくる追尾ミサイルをあっさりと回避。
ミサイルが建物に当たって爆発した。
確実に距離を詰めてくる。
沙羅の視界にドリームが入る。
瞬時にビーム砲と追尾ミサイルの連射。
ドリームはかまわず突進してゆく。
　大輔「おいおい。」
強い者が、弱い者を追いつめる迫力。
ドリームにビーム砲が命中、追尾ミサイルは斬られた。
既に近接格闘武装に切り替えている。
沙羅はまさか突進してくるとは思っていなかったようで、一気に距離を詰められた。
旋回して逃げるか、それとも真っ向勝負か。
逃げれば、その時にかなりダメージをくらうかもしれない。
沙羅も向かっていった。
近接格闘で真っ向勝負か。
素早い動きから繰り出される攻撃と、的確なガード。
沙羅のビーム弾からの連携は、ほとんどダメージは与えられない。
現状少しだけリードしているが、すぐに逆転されるだろう。
武装変更の隙に斬られる。
右腕をやられた。
ゲームなので、一撃で切り落とされたりはしないが、スピードは落ちる。
沙羅は右腕を諦め、左手でビームソードをつかんだ。
ガードが無い右腕での防御だから、少し防御がきついだろうが、攻撃を重視したようだ。
斬り合う。
右腕に傷がある分だけ、沙羅が不利。
見た目戦いは五分に見えるが、ダメージは沙羅の方が多く受けている。
このままでは負ける。
防御を捨てて、回避と牽制に切り替えた。
ビームバルカンがドリームに命中する。
しかしドリームはかまわず斬ってくる。
かわせない。
勝負は見えた。
終わってみれば、楽勝とは言えないが、夢ちゃんの圧勝だった。
　大輔「沙羅でも、全く歯が立たなかったな。」
　吐息「そんな事ないのさ。後少しのような気がするのさ。」
　大輔「いや、夢ちゃんなら、まだ何か持ってるような気がするよ。」
シングルでは、まだまだ勝てない気がした。
沙羅が待合室に戻ってくる。
いつも冷静で無表情な沙羅が、少しイライラとしていた。
　沙羅「あーもう、なんであんなに強いのよ。」
慰めても仕方がなさそうだ。
　大輔「人間業じゃないよ。あの動きは。自分の手足のように操ってるからな。」
　吐息「操作してる指、見えないし。」

　沙羅「こうなったら、毎日指立てふせよ。」
まあ、やりたければやってもいいけど、関係ないと思うよ。
沙羅は俺の横の椅子を荒々しく引いて座った。
　大輔「シングルなら、お前は間違いなく強いよ。」
慰めるつもりはなかったけど、なんとなく俺は言っていた。
　沙羅「さあ、次、ダブル観るよ。」
悔しい思いを押さえて、沙羅はテレビを見ていた。
そう簡単に切り替えられるものではないだろうけど、沙羅は既に次を見ていた。
次は、ドリームとカズミンペア、トゥデイとダストペアの対戦だ。
同僚対決だけど、彼女たちは本気でぶつかるから、対戦はきっと面白いものになるはずだ。
それに、ドリームが負けるとしたら、ダストが一番確率が高い。
調べてはいないけど、ドリームがダスト以外に負けたのって、果たしてどれくらいあるのだろうか。
そんな事を考えているうちに、機体４機が全て表示される。
ダストとトゥデイは、俺が対戦した時と同じ、スピード型万能機と、とにかく武器を積みまくってる鈍重な機体。
ドリームは中長距離機で、カズミンは近中距離の万能型。
カズミンの機体は、俺の機体にかなり似ている。
この戦いの結果を予想すれば、９割はドリームとカズミンペアの勝利だろう。
しかし知里ちゃんは、敵を知れば最強だと言われている。
マップは普通に街で、そこに機体が表示される。
間もなくバトルがスタートした。
ドリームは相変わらず、敵機へと突き進む。
カズミンもその後ろから続く。
ダストとトゥデイは、その場からあまり動いていない。
それにしても、あのトゥデイに対して、簡単に近づいていくもんだ。
ドリームの自信に感心した。
すぐにお互いが射程内に入る。
攻撃タイミングはほぼ同時。
ドリームとカズミンが散開して、左右にかわす。
トゥデイの大量攻撃も、この二人にかかれば、かわすのはたやすいのか。
いや、ドリーム回避にあわせて、ダストがビーム砲で、ドリームを攻撃していた。
命中。
流石にドリームの動きをよく知っている知里ちゃんだ。
しかし、それはお互い様のようだ。
ドリームのビーム砲が、ダストに命中していた。
まずは五分の立ち上がり。
散開したドリームを追いかけるように、ダストが急進する。
スピードは五分か。
しかし背後から追うダストが有利。
カズミンがその間に、トゥデイを遠目から狙う。
少しずつ削るが、トゥデイは装甲が厚いし、距離が離れすぎている。
一気に倒すのは無理だ。
トゥデイはカズミンを警戒しつつ、ゆっくりとドリームへと近づく。
知里ちゃんは、ドリームを落とすつもりだ。
カズミンの方が良いような気もするが、ドリームを自由に動かすのも危険と判断したのだろう。
このゲーム、カズミンが長距離が得意な機体だったら、既に勝負が決定していたかもしれない。

まあそれならそれで、こんな戦術は取らないだろうけど。
それにしてもドリームは戦い辛そうだ。
全ての動きが読まれている。
それでも全くダメージをくらわない回避力は流石だけど、徐々に退路が限られてきた。
完全に、知里ちゃんの作戦どおりだろう。
ドリームをトゥデイの射程内に追い込み、挟み撃ちにするつもりだ。
でも果たしてそれが成功したところで、ドリームに通用するのだろうか？
　大輔「えっ？」
　沙羅「早い！」
トゥデイの一斉攻撃のタイミングが早い。
ロックオンせずに攻撃したのか？
でも、この距離でこの角度、ドリームなら楽勝でかわすだろう？
爆発音が響く。
　大輔「当たった！」
　吐息「凄い。この人もロックオンせずに攻撃するのが得意なのかな？」
いや、得意って言うか、今のはたまたま良いところに飛んだだけな気がする。
それが証拠に、当たったのは一部だけだ。
しかし、この状況はドリームにまずい。
すぐにまた攻撃されるし、後ろから知里ちゃんが既に絶好の位置だ。
ドリームが負けるのか？
トゥデイの再びの一斉攻撃。
まただ。
ロックオンしていては発射できないタイミングだ。
後ろには下がれないドリーム。
だけどドリームなら問題なくかわせるはずだ。
またも爆発音が響く。
　大輔「何故当たる？！」
　沙羅「このトゥデイの子、運がいいわね。」
あの五月蠅くて、竜郎が気に入ってる子だ。
そう言われれば、なんとなくギャンブラーな雰囲気を持っていたかも。
それにしても、運だけでドリームが負けるのか？
次撃たれたらやばいかも。
　吐息「カズミンが来てる！」
　沙羅「まあ、これだけ隙作ったら、近づかれるわね。」
　大輔「でも、装甲が厚そうだから、タイム的には不利だぞ。」
しかし、俺の懸念はすぐに解消された。
　沙羅「カズミンうまい。完全に急所を狙ってる。」
なんだ？この人。
相手の動きが遅いとはいえ、少しの誤差もなく、更には優先順位も間違いなく連続攻撃。
トゥデイの攻撃が止まった。
射程に入ったドリームのビーム砲と追尾ミサイルの攻撃。
一瞬にして、トゥデイが落とされた。
戦術では、間違いなく知里ちゃん達が勝っていた。
トゥデイの強運が必然とするならばだけど。
しかし、ドリームの強さと、カズミンのうまさがそれを上回った。
いやあ、まいったね。

やっぱ強いは。
俺はしばらく、戦闘の終わった画面を、ただ眺めていた。

痛恨のミス

チームダブルの戦いは、森学ゲーム部対秋葉のゲーセンメンバー。
テクニックという面では、おそらく互角。
トゥデイダストの今日子って子は、あまりテクニックはなさそうだからな。
あくまで平均で、それ以外はおそらく森学が上だろう。
俺の脳内シミュレーションでは、森学の圧倒的勝利しか思い描けない。
この予選で森学が２位通過だったのは、このチームができて間もない頃に、連敗でもしたんじゃないだろうか？
それくらい強かった。
勝負はあっさりと、森学ゲーム部勝利で終わっていた。
　大輔「あんなチームに、どうやって勝つんだ？」
　吐息「わからないのさ。考えるのは沙羅の仕事なのさ。」
　沙羅「いや、すぐには思いつかないし。」
確かに、知里ちゃんが言っていたとおり、ドリームダストより、ドリームカズミンのが強そうだ。
そして、移動系を知里ちゃんが担当するトゥデイダスト。
単機だときついけど、チーム戦なら最強パートナーだ。
おそらくは最強の破壊力。
それが何故当たるかわからない今日子ちゃんの運。
移動と守りは、完全に知里ちゃんがサポートしている。
力の差を思い知った感じだ。
俺がしばらく画面を眺めていると、テレビスタッフの人に声をかけられた。
いよいよ、俺と吐息のゴッドブレスの出番だ。
負ければ、森学ゲーム部の完全勝利が決まる。
絶対に負けたくない。
勝てる隙はどこかにあるはずだ。
俺は吐息と共に、撮影スタジオに入った。
ココにきて、やたらと緊張してきた。
よく考えたら、俺がテレビに出るなんて初めてじゃないだろうか？
そう思うと、更に緊張が増す。
目の前には、スタジオ観覧者がいる。
いや、俺がこんな所に？
夢かな？
夢だろ？
　アナ「はい、夢ちゃん、いよいよだけど。」
ああ、夢ちゃん？
そうだそうだ。
これから、俺は決勝戦を戦うんだ。
少し意識が戻ってきた。
　夢「はあ。まあ、がんばります。」
　アナ「夢ちゃんに関しては、全種目制覇がかかっていますが。」
　夢「はあ。まあ、がんばります。」
夢ちゃんて、なんかやる気なさそうなんだよな。
　アナ「では、知里ちゃん、どうですか？自信のほどは？」
　知里「力は互角ですからぁ～、勝敗は時の運ですぅ～」

おいおい、えらい冗談だな。
　アナ「ははは、えらい冗談ですねぇ。」
だろう？そうだよね？
　知里「えっと、じゃあちょっと不利かなぁ？」
　大輔「ええーー！！・・・いや、なんでもありません。」
おいおい、知里ちゃん何をいうの？
　アナ「知里ちゃん、頭がおかしくなったでちゅかぁ？では、次、ゴッドブレスのお二人に話を聞きます。」
このアマ、ってかアナ、死なす。
絶対死なす。
知里ちゃんを馬鹿にするんじゃねぇ！！
　大輔「はい。」
弱！
俺弱！
　アナ「相手があのドリームダストですが、少しくらいは良い勝負できそうですか？」
完全に俺達が負けるような口振りだな。
まあ、俺もそう思うけど。
　大輔「まあ、少しは。」
　アナ「ですよねぇ～。一応ココまで残ってるんですから、少しはやってもらわないと。」
はいはい。
　アナ「では、あなたはどうですか？」
名前も覚えてないのかよ？
　吐息「勝つのさ。負ける気しないのさ！」
あれ？
吐息が怒ってる？
珍しい。
って、そうでもないか？
　アナ「おお！それくらい言ってくれた方が盛り上がりますね。後で恥をかく事にならなければいいですけど。」
　吐息「お互いね。」
うっわぁ～なんか吐息が怖いんですけど。
　アナ「では、席についてください。」
俺達は席に着く。
知里ちゃんと目があったので、アイコンタクトで、「アイシテル」と送っておいた。
さあ、いよいよだ。
いつのまにか緊張もふっとんでいた。
コントローラーが手に馴染む。
うん。
なんとなくやれそうだ。
機体の変更はない。
お互いの機体がすぐに表示される。
向こうも変更は無いようだ。
　大輔「スタンダードな機体だけど、名前だけで迫力があるよな。」
　吐息「名前だけなら、うちらのが強いのさ。神だし。」
まあ、そうなんだけど。
街フィールドが表示される。

機体がそこに映し出された。
デカ盾の機体。
俺達は見慣れた機体だけど、主流ではない機体。
この機体で、今日ドリームダストを倒す。
ゲームがスタートした。
まずは離れた位置での様子見。
これは俺達の戦術だ。
向こうも自分たちの戦術を押し通すようだ。
直進してくる。
先にこちらが射程内に敵機を捕らえる。
長距離ではこちらが有利。
最初の追尾ミサイル。
更にはビーム砲での牽制。
うまくかわして更に距離を詰めてくる。
今度は同時の攻撃。
ドリームダストもこちらを射程に入れたようだ。
だったら、こちらも向かっていくだけ。
盾で防いでそのまま直進。
更にブースト。
一気に距離が詰まる。
ドリームダストは得意距離を維持するようだ。
それをされれば、こちらが圧倒的に不利。
　大輔「食らいつけ！」
俺はビーム砲を、ドリームダストの進行方向やや前方に撃ってから、ビームソードに持ち替えた。
ドリームダストにビーム砲が命中した。
　吐息「かわさなかったのさ！」
俺は再びビーム砲に持ち替える。
意地でも得意距離で勝負してくるようだ。
それをされるとこちらが不利。
もう一度ビーム砲を前方へ。
そして今度はロケット弾も撃つ。
ドリームダストが体を反転させる。
今度は流石に直進しなかったようだ。
俺はもう一発ビーム砲を放つ。
ドリームダストから接近してきた。
ビーム弾が俺達を襲う。
　吐息「回避！」
　大輔「ダメだ！」
俺の言葉に驚いて、吐息が動きを止める。
盾の操作は俺がおこなって、ビーム弾を止めた。
　大輔「逃がす隙を作るな！」
何故俺は瞬時に判断できたのだろう。
でも、そう思ってしまった。
このビーム弾をかわしていたら、おそらくドリームダストは距離をあけて、得意距離勝負にしていたはずだ。
少しのダメージは受けたが、こちらの方が絶対に有利。

ドリームダストだって、得意距離で戦う為に、ダメージを受けていたんだ。
おそらくこの勝負は、得意戦術を貫けた方が勝つ。
ドリームダストは諦めて、武器をビームソードに切り替えた。
俺もそれにあわせてビームソードに切り替える。
近接格闘戦だ。
これで逃がさなければ、互角の戦いができる。
ドリームダストは中長距離機なのに互角ってどうよ？って思うが、それが力の差。
パイロット能力は、戦術で埋める。
完全に互角。
よくもまあ、ガードで確実に防御してくるものだ。
それでも回避はさせない。
お互いが慎重な攻め。
さて、どこかでミスした方が負けるか、それともうまくやった方が勝つか。
ミスを待つなんて、面白くない。
　大輔「吐息、あれやるぞ。」
　吐息「このままじゃ、面白くないもんね。」
吐息が、タイミングを計る。
俺はそれにあわせて、確実に狙う。
敵の横からのビームソードを、吐息がわざと受けた。
拮抗していたゲージに差がでた。
今俺達は負けている。
しかしこれを受けたのには理由がある。
左半身の形で戦っていた我らが機体は、ビームソードの攻撃を受ける事で、敵の正面を向いた。
　大輔「うりゃー！！」
俺は追尾ミサイルを撃った。
ロックオン無しの突然の攻撃。
しかしそれは当たる。
何故ならそれは「俺の攻撃」だから。
吐息が機体を下げ、爆発からは回避する。
一気にゲージが逆転だ。
吐息がすぐに敵に近づく。
後は俺がビームソードで斬って勝ちだ。
　大輔「うおー！」
プチっ・・・
　大輔「ん？」
　吐息「あっ・・・」
俺はあまりに白熱した戦いに、コントローラーを思い切り振って戦っていたようだ。
そして、盛り上がりが最高潮に達した時、コントローラーを本体から抜いてしまったようだ。
いや、ココで冷静になれれば良かった。
なんせ赤外線通信で、ケーブルがきれても操作はできるから。
しかし、とっさの事に、俺は冷静ではいられなかった。
フリーズした俺をよそに、爆発音がスピーカーからむなしく鳴り響いていた。
一気の反撃に、ゴッドブレスは撃墜されていた。

テレビではきっと、夢ちゃんの全種目制覇に盛り上がっている事だろう。
俺もまあ、ドリームダストファンとしては、それで良かった気もする。

でも、やはり、やはり悔しかったんだ。
対戦が終わった後、アナから何か言われたが、どう返事したか覚えていない。
知里ちゃんとも握手して別れたけど、その部分以外の記憶があまりなかった。
完全に俺のミスで負けた戦いだ。
泣けてきた。
泣かなかったけど、泣きたかった。
俺は悔しさを隠して、応援してくれた竜郎達と合流して、リベンジを誓った。

始まりの日

今日は７日、学生なら春休み最後の日。
俺は４日の敗戦から立ち直り、なんとか知里ちゃんにメールを送った。
別に決勝戦の話をしたわけではない。
ああ、まあ、言ってしまえばデートしませんか？みたいなぁ。
メールでって言うのがポイントだ。
電話でなんて、恥ずかしくて言えるわけないのだ。
で、返事がきたんだけど、あっさりとオッケーだった。
返事は、「いいよぉ～♪」と書いてあった。
たったこれだけの返事ってのも寂しかったが、それ以上に嬉しくて、俺は部屋で一人、はしゃぎまくった。
当日、俺は新宿アルタ前で知里ちゃんを待つ。
時間は午前１０時。
俺は１４時くらいに待ち合わせしようとしたんだけど、どうやら森学の女子寮からココまで、３時間以上かかるらしく、それだとあまり遊べないらしい。
だからって１０時に待ち合わせじゃ、ほとんど始発じゃね？
俺としては嬉しすぎる事なんだけど、知里ちゃんは大丈夫なんだろうか？
そんな事を前日から考えていたわけだけど、やはりと言うか、３０分ほど前にメールが届いた。
内容は、「遅れちゃうよぉ～ごめんなさいだよぉ～」
・・・
いや、遅れるのは、俺は一向にかまわない。
だけどこれだと、どれだけ遅れるねんって話。
俺はメールを返信する。
「どれくらいおくれそう？」
送信っと。
しばらくすると、メールが返ってきた。
「３２０ｂｉｔまでならタダだよぉ～」
・・・
意味がわかりません。
なんですか？
どこかの国の通貨ですか？
俺は再び返信する。
「意味がわかりません。」っと。
しばらく待つと、再び返事が返ってくる。
「えっとぉ～全角で２０文字かな？」
どう理解すれば良いのだ？
全角で２０文字ほど遅れるって。
ん？
遅れる？
おくれる。
送れる。
ああ、なるほど。
直通メールで送れる容量か。
って、わかるかぁー！！

俺は再び返信メールを打ち込む。
「そうだね。２０文字だね。で、知里ちゃんは」
これで２０文字か。
少なくね？
って、俺の機種は２００文字だったぞ。
文字数も天然に間違っていたのか。
俺は再びメールを打ち直す。
「違うよ。２００文字までオッケーだよ。で、知里ちゃんは、今日の待ち合わせ、どれくらい遅れるのかな？」
今度は漢字で書いたし大丈夫だろう。
しばらくすると、またメールが返ってきた。
内容を確認。
「さっき、メール書くのに夢中で、駅降りるの忘れてたよぉ～」
・・・
知里ちゃんて、こんなに天然だったんだ。
あんなにゲームでは強いのに。
ガッカリ・・・
なんてするわけない。
むしろ大歓迎、ますます好きになった。
まあそんなわけで、結局何時間遅れるかわからないけれど、俺は今、ただただ待っているってわけだ。
今が１０時だから、最悪１４時くらい、早くても後１時間はこないだろう。
そう思っていたけど、知里ちゃんは１０分後、俺の前にあらわれた。
　知里「ごめんだよぉ～」
走ってきた知里ちゃんは、俺にすがりつくように俺の肩に手を置いた。
な、なんて幸せなんだろう。
たった１０分の遅れで、俺はこれだけの感動を得る事ができた。
だったら１時間でも２時間でも待つっちゅーねん。
　大輔「いやいや、たった１０分だし。それに電車ちゃんと降りてれば、間に合ったんじゃない？」
そうだ。
メールして乗り過ごさなければ、きっと間に合っていたはず。
　知里「違うよぉ～。駅に到着が９時５９分予定だったから、３０秒は遅れてたよぉ～」
なんと！
たった３０秒遅れるからって、メールで謝ってきたのか。
　大輔「知里ちゃん、君はなんてステキで良い子なんだーー！！」
あれ？
俺の心の声が、マイイヤーから聞こえてきたのだけど、気のせいかな？
　知里「え、えっと・・・そ、そんな事ないよぉ～」
やばい。
可愛い。
てか、アルタ前で向かい合って、俺達は何をしているのだろう。
通り過ぎる人々の視線が痛い。
　大輔「えっと、じゃあ、とりあえず、ちょっとお茶でもするか。」
　知里「うん。」
なんだなんだ、この中学生の恋愛のような空気は。
純粋にもほどがあるだろう？
俺、高校生の頃彼女いたし、一通り経験していたはずだ。

おかしい。
俺はいつからこんなピュアボーイになってしまったんだ？
もしかして、付き合っていたのは全て夢だったとか？
　知里「あ、アイスクリームがおいしそうだよぉ～」
ちょっとお茶が、アイスクリームですか？
望むところです。
俺は飯の代わりに、チョコパフェを食う男なのさ。
　大輔「じゃああそこでアイスを食べよう。」
俺は知里ちゃんをつれて、アイス店に入った。
おっと、ココは、女性同伴でしか入れない店らしい。
て、アイス屋ってよりは、フルーツ関係の店なのかな？
フルーツパフェにフルーツポンチ、杏仁豆腐。
ああ、なんて甘い。
　知里「じゃあ私は、トリプルアイスパフェを～」
　大輔「じゃあ俺も。」
選ぶのも面倒だし、アイスだったらなんでもいいや。
俺はただただ、知里ちゃんの顔を眺める。
いやぁ～、目の前に、あの知里ちゃんがいるのですよ。
俺は今人生最良の日を過ごしているのではないだろうか？
　知里「大輔ちゃん、決勝は負けたと思ったよぉ～」
なんの話だ？
俺は頭にクエスチョンマークを出してみる。
　知里「バトルグリードのチーム決勝だよぉ～」
ああ、あれか。
すっかり忘却していた。
　大輔「いやぁ、俺も勝ったかと思ったんだけどね、神が俺に試練を与えやがってね。」
もう負けた事なんてどうでも良い。
目の前に知里ちゃんがいるだけで良いのだ。
　知里「そうなんだぁ～。最後どうして攻撃しなかったのぉ～？」
　大輔「ん？あれか。あれは、俺がコントローラーを引っこ抜いてしまって、一瞬フリーズしちゃったんだ。」
いやぁ、ホント頭真っ白になっちゃったよ。
　知里「ええ！そんなトラップがあのゲームにあったんだぁ！普通コントローラーが抜けても、フリーズしないよねぇ。」
　大輔「そ、そう？まあ俺が焦ってたからフリーズしたんだろうね。」
　知里「ええ！人が焦ってる事を、ゲーム機が察知しちゃうのぉ～！ビックリだよぉ～！」
なんだか話がかみ合ってるようでかみあってないけど、まあ知里ちゃんが目の前にいるから良いのだ。
　店員「おまたせしました。トリプルアイスパフェです。」
「ドンっ！ドンっ！」と、二つおかれたトリプルアイスパフェ・・・
ドンって、ドンだけぇ～って感じ。
うまい！
　大輔「そんな事いってられるかぁー！！」
　知里「だ、大輔ちゃん、急にどうしたのぉ～？」
おっとやばい、少し我を忘れそうだった。
風邪の谷のナオシカ、私を沈めておくれ。
　大輔「ああ大丈夫。チョッピリパフェが大きかったから、嬉しくなっちゃって。」

　知里「そうなんだぁ～。私も、ほんのチョッピリ大きいから、嬉しくなっちゃったよぉ～」
いやいや、これをほんのチョッピリっていうのはどうかと。
トリプルだから、３倍なのはわかるけど、縦横両方３倍だから、実質９倍なんじゃね？
まあ、値段は・・・５倍くらいだから、良心的っちゃ良心的だ。
お得だね。
　大輔「じゃあ、食べようか！」
　知里「食べちゃうよぉ～」
・・・
ああ、パフェを一生懸命ほおばる知里ちゃん、ステキだ。
　大輔「いや、ステキってか、もう抱きしめたくなるね。」
　知里「何がぁ～？」
うわぁ～口の周りにアイスつけちゃって可愛い。
　大輔「いやね。知里ちゃんがあまりに可愛いから、ついうっかり抱きしめたくなるんだよ。」
って、やべ、本音だ。
　知里「え、えっと・・・大輔ちゃんも、かわいいよぉ～・・・」
あれ？知里ちゃんが真っ赤だ。
俺も真っ赤だ。
ツタ～の葉っぱも真っ赤だなぁ～♪
いやそれはどうでも良い。
喋れない・・・
何を喋れば良いのだ？
こんな時、世の男と女は何を語るのか？
　知里「大輔ちゃんと、こうやって会うようになるなんて、不思議だねぇ～。」
ん？それは、俺の第一印象は、なによこのカス男は！みたいな感じだったのだろうか？
　大輔「最初、俺っておかしかった？」
　知里「ん～・・・おかしかったよぉ～」
ええ！！ショックー！！
　大輔「ど、どのへんがおかしかったかな？顔？それとも神経？」
　知里「顔なんて見えないよぉ～！」
ガーン！
顔すら見てくれてなかったのか・・・
　大輔「そ、そう。じゃあどのへんが？」
　知里「ん～。面白いギャグばっかり言ってたよね。だからとってもおかしくて笑っちゃったよぉ～。
」
何それ？
おかしいは、面白いの意味か。
でも俺、知里ちゃんにそんな恥ずかしい姿を見せた事ないけど。
俺が駄洒落が好きだとか、面白おかしい事言うのは、一部の親しい友人しか知らないはずだ。
　大輔「俺、そんな事言った記憶、ないけど・・・」
　知里「え～。毎日言ってるよぉ～！」
なんと！
俺は知らず知らずに、そんな事を言っているのか。
　大輔「って、毎日？」
　知里「うん。毎日だよぉ～」
なんだ？
夢の中で俺が出てきて、そんな事を言ってるとでも？

もしかして知里ちゃんは、天然なだけでなく、世界一のイタイ子なんでは・・・
ガクガクブルブル・・・
　大輔「毎日、会ってないよね？」
　知里「ん～。偶に休むよね？」
　大輔「休む？」
　知里「うん。だからその時は、一人で狩り行ってるよぉ～」
　大輔「狩り？」
　知里「うん。あの街、なんだっけ？首都の港から行ける・・・」
ああ、リノ２の話してたのか。
って、いつも一緒に狩り行ってるって・・・
　大輔「チサト？」
　知里「あれ？言って無かったっけ？」
　大輔「聞いてないし言ってない。」
　知里「あれ～そうだったんだぁ～。」
・・・
　大輔「なんで俺だってわかったの？」
　知里「なんでだろぉ～？」
おいおい、勘なのか？
普段の俺と、リノ２で使ってるキャラ、雅之は、全く印象違うと思うけど。
愛の力か？
　知里「ああ、これかも～。」
そういって知里ちゃんが、携帯を差し出した。
そこには、俺が知里ちゃんに送ったメールがあった。
　知里「ほら、今時、半角記号だけの顔文字使う人、いないよねぇ～」
俺は面倒だから、顔文字登録はしてないからな。
　大輔「って、ええーーー！！！知里ちゃんとチサトが同一人物！！」
　知里「読み方変えてるだけだから、わかると思ってたぁ～」
じゃあなにかい？
俺と知里ちゃんは、知らず知らずのうちに、５年も前から知り合っていたと。
それも、ゲーム内とは言え、とても仲良しだったと。
なんせゲーム内で俺が連んでるのは、チサトと、ゴッドブレスの仲間だけだ。
　知里「雅之には、私かなり助けられたよねぇ～」
　大輔「ああ。」
あれは俺もチサトも、まだゲームを始めたばっかりの頃、チサトは一人でゲームをしていたんだ。
俺ももちろん一人。
で、狩り場で狩りをしてたら、チサトの狩りがあまりに見事で、つい話しかけてしまったんだ。
その頃、友達がいないって言ってたチサト。
だから俺は放っておけなくて、なんとなく連むようになった。
それからすぐに、チサトには友達が沢山できたらしい。
悩みを聞く事は無くなったけど、俺達は一緒していた。
２年くらい一緒してて、かなり仲良くなって、気が向いたら会おうかとも話してたっけ。
でも、突然チサトがリノ２にこなくなった。
何かあったんだろうけど、俺は何も出来なかった。
なんせつながりは、リノ２だけだったから。
で、再び会ったのが、俺が高校１年の２月。
チサトが中学３年の２月。

受験勉強をしていたって言ってたけど、チサトはなんとなく出会った頃のチサトに戻っていた。
友達のいなかった頃に。
聞いても友達はいると言っていた。
俺は傷つけるのが怖いから、どうして良いかわからなかった。
当時付き合っていた彼女にも相談してみた。
あまりいい顔はしてくれなくて、何も言ってくれなかったな。
今思えば当たり前か。
で、なんとか聞き出せたのが、春休み。
好きだった先生が亡くなったとか。
その先生に助けられて、友達も沢山できたとか。
俺はどうしたらいいかわからなくて、寒いギャグとか言いまくって、なんとか笑ってもらいたくて。
それから半月くらいして、チサトはまた元気になったんだ。
新しい友達が出来たから、楽しく頑張れそうだって。
そういや、ゲーム部で頑張ってるって言ってたな。
バトルグリードの話しも少しはしたかもしれないけれど、記憶にないから大した話はしていなかったんだろう。
リノ２をやってるわけだから、基本はリノ２の話。
それ以外は、俺が寒いギャグを言ってるくらいか。
それでも、今思えば、知里ちゃんとチサトが重なる事が多い。
友達にゲームの天才がいるとか言ってたし。
俺は、知里ちゃんを好きになって当然だったんだ。
何故なら俺は、チサトが放っておけなくて、会いたくて、とても好きだったから。
　大輔「そう言えば俺、チサトの事守ってあげるって、言ってたよな。」
　知里「うん。チサトはちゃんと守られていたよぉ～。寂しくても、頑張ろうって思ったもん。」
　大輔「そう言えば俺、ゲームの世界が実現したらとか、言ってたよね。」
　知里「うん。言ってた。実現しちゃう？」
　大輔「ああ、知里ちゃんが良ければ、俺は絶対そうしたいね。」
　知里「うん。じゃあ、とりあえずは、私の・・・」
　大輔「うん。俺の彼女になって・・・ＹＯ！」
　知里「ははは。うん。」
俺達がゲーム内で行った事。
このゲームには、結婚システムってのがあって、キャラ同士結婚させる事ができる。
だから俺は、守ってあげる約束を果たす為、ゲーム内で結婚したんだ。
いつのまにか、目の前のトリプルアイスパフェは、溶けてシェイクみたいになっていた。
でも、今の俺達には、これを楽しめるだけの相手がいたから。
二人で一気に飲み干して、店を出た。
中学生のようなピュアな恋愛をしているみたいだけれど、それで間違いないのだ。
俺達は、ゲーム内では、中学生から恋愛をしていて、今チサトと初めて会って、リアルの恋愛を始めたばかりなのだから。
　大輔「わかってしまうと、チサトの方がしっくりくるな。」
　知里「じゃあ、私は雅之だぁ～」
　大輔「・・・いや、大輔って呼んでくれ！」
　知里「じゃあ、私も知里だよぉ～」
　大輔「だな。」
　知里「うん。」
俺達はこの後も、新宿で遊べるだけ遊び倒した。

今日だけは、お金なんて考えずに遊んだ。
なんせ今日は、俺の超幸せ人生スタートの日なのだから。

カズミン～和己と夢～

バトルグリード全国大会決勝。
俺は姉貴に勧められて、テレビを観ていた。
姉貴が卒業したばかりの高校、そこのゲーム部の後輩が出ているらしい。
別にゲームに興味が無いわけではない。
でも、特に好きだという訳でもない。
俺は特に本気になれるものがなくて、ゲームもその中の一つというわけだ。
そんなゲームの一つである、バトルグリードの決勝を観て、俺は少し感動していた。
いや、正確には、ある一人の女性に。
たかがゲーム、そんなものに本気になる気がしれない。
そうは思うのだけど、この女性のプレイは、俺を魅了していた。
高鳥うらら、それが彼女の名前。
俺はメモした。
書かなくても、それくらい既に覚えていたけど、なんとなく書いた。
ゲームが終わった後、そのうららさんが、同じゲーム部の部長に告白していた。
ショックだった。
全く知らない人が、全くしらない人に告白しただけなのに。
でも、ショック以上に、更にうららさんが好きになっていた。
強く魅力的な彼女に。

入学式を終え、俺はうららさんと同じ場所にたっていた。
そう、偶々なのだが、俺は同じ学校に通う事になっていた。
歳は２つ上だけど、そんな事は関係ない。
絶対、俺の彼女にしたい。
その想いが、俺をゲーム部へと誘った。
初めての顔合わせは最悪だった。
うららさんには、そっくりな妹のきららってのがいて、俺は間違ってしまったのだ。
初めて会った人で見分けたのは、部長の達也先輩だけで、みんな気にする事はないって言っていたけど、俺は悔しかった。
好きな人を間違うなんて。
だから俺はしばらくの間、うららさんを観察していた。
ゲーム部での活動目標は、うららさんときらら先輩を見分ける事ができるようになる事。
俺は本気だった。
今までこんなに本気で何かにとりくんだ事は無かった。
そして９月になる頃、ようやく完璧に見分けられるようになった。
だから俺は、意を決して告白した。
返事は、バトルグリードで勝負して勝ったら、付き合ってくれると。
俺はゲーム部にいたけど、全く真面目にやっていなかったし、勝てるわけも無かった。
一応期間は、うららさんが卒業するまで。
挑戦は１０回を越えた。
それでも、結局卒業まで、一度も勝てなかった。
種目シングルでは、ドリームが絶対的強さを誇っていたし、知里先輩のダストもそれに近い強さだ。
その影に隠れていたせいか、ただあまり参戦していなかったからか、どちらかはわからないけれど、うららさんのブライトは、少なくともダストには負けない強さがあった。

俺は悔しくて、夢先輩と組んで、全国一を目指した。
せめて見返す為に。
そして見事全国ナンバーワンになったけど、今回は夢先輩の力で勝てたと言われても否定できないと思った。
夏の大会、俺はシングルでナンバーワンを目指す。
俺の順位は、決勝戦進出確定日前日に３位だった。
ドリームと対戦するには、後一つ順位を上げないといけない。
知里先輩に頼んで、ゴッドブレスの大輔さんに連絡してもらう。
２位の沙羅さんと、直接対決がしたいと。
直接対決で勝てば、俺が２位になれる。
対決の申し込みは、快く受け入れて貰えた。
対戦時間を合わせて、俺達のバトルが組まれる。
バトルが始まった。
互角の勝負。
流石に今まで、夢先輩に練習に付き合ってもらっていたから、かなりやれる。
敵はドリームとほぼ同じ武装だ。
ドリームにはほとんど勝てないけれど、このレッドストーンならいける。
そして、俺は勝った。
その後、勢いに乗ったからか、決勝でドリームにも勝った。
夢先輩は負けたのに、俺の強さを、いや、強くなるためにした努力を誉めてくれた。
この時思ったんだ。
俺は高校に入るまで、何も努力して来なかったけど、努力するのも良いものだと思った。
うららさんに、そして夢先輩に、俺は教えられたんだ。
そしていつのまにか、俺はうららさんと同様、いや、それ以上に、夢さんが好きになっていた。
春の大会も一緒に頑張って、あの辺りから俺はきっとわかっていた。
凄く気が合って、二人だと普通よりも大きな力が出せる事を。

我がゲーム部に、あの頃のメンバーは俺だけになっていた。
正確には、サークル☆ドリームダストのメンバーは、皆、森学ゲーム部を辞めていた。
新しく新入生が３０人ほど入ってきたので、皆☆ドリームダストに専念する事にしたのだ。
だから今後は、もしかすると森学ゲーム部が俺達のライバルになるかもしれない。
でも、いままで積み上げて来た努力が、そう簡単に覆されるなんて、全く思っていないけど。
で、時は流れて２０１４年の春。
夢先輩も、知里先輩も、あの五月蠅い今日子も、皆卒業していった。
かといって、俺達のつながりが無くなるわけではない。
サークル☆ドリームダストは、まもなく会社となり、俺も来年にはそこの社員になるのだから。
それに夢先輩とは、バトルグリードで一緒している。
シングルでは、ドリームとカズミンの決勝が決まっていた。
ダブルでも、チームでも、俺達のペア、チーム共に決勝進出だ。
チームダブルは、二人ではでれないので今回は辞退。
たしか森学ゲーム部か、ゴッドブレスの人達が出ていたと思う。
知里先輩は、ゴッドブレスの大輔さんと一緒にダブルにでていて、決勝での俺達の相手だ。
この二人は付き合って既に１年になるし、コンビネーションも抜群な強敵だ。
でも、俺達は負けるつもりは全くないけど。

コンビネーションだって、絶対に負けていない。
付き合おうとはっきり言ってはいないけど、俺と夢先輩は、最近はいつも一緒にいるんだ。
って、はっきりさせても良いんだけど、それは今日の大会で優勝したら言う予定。
うららさんを越える為に。

　アナ「シングルは、☆ドリームダスト同士の戦いとなりましたが？」
　和己「当然です。」
　夢「う、うん。」
　アナ「えらい自信ですね。」
　和己「俺達が他に負けるなんて、ありえません。」
　夢「ちょっと言い過ぎだって。」
　和己「俺達は誰よりも努力してきたんだから、言うくらいは良いんだよ。」
そうだ。
俺達は努力してきたんだ。
　アナ「そうですか。では、早速シングル決勝を始めてもらいましょう！」
俺達は、それぞれの席についた。
最近の戦績は、ほとんど五分。
若干ドリームの方が上かってくらい。
スピードのあるドリームに、正確な操作で俺のカズミンが挑む。
接近出来ればこちらが有利だけれど、そう簡単にはいかない。
ゲームがスタートする。
ドリームが開始直後から接近しない相手なんて、おそらくはカズミンだけだ。
まずは離れた位置で様子を見る。
ドリームが警戒しているだけで、俺のカズミンが強い事が観衆に伝わる。
それだけドリームが築きあげてきたものが、大きいって事だ。
お互い正確な攻撃に、正確な回避。
ゲージはお互いに減らない。
このところは、判定での決着ばかりだ。
５分では勝負はつかない。
でも今日は、無茶もしてみたい気分。
俺はブーストも使って、一気に左から回り込む。
近距離まで近づいた。
イニシアチブはドリームにある。
ビーム弾がカズミンに命中する。
それでも急所は完全に避ける。
今度はこちらの番だ。
今日の対戦の為に、密かに機関砲を搭載しておいた。
普通なら、ビームバルカンを搭載するスペースに。
連続する発射音。
ほとんどがドリームに命中する。
一気にゲージは逆転だ。
うまくいった。
これで後は普通にやれれば、俺の勝ちだ。
しかし流石にドリームだ。
一気に接近してきた。
本来なら、こちらが更に有利になったと言えるだろうが、今日はビームバルカンは積んでいない。

そのメリットは既に使用済みだ。
だからココからの戦いは、敵が夢先輩だけに五分。
ミスした方が負けるか、ミスしなければ俺の方が有利。
ドリームはビームバルカンとビームソードでの連携攻撃。
こちらはビームソードだけ。
ただ、こちらのビームソードの方が威力がある。
なんせこちらは、移動スピードよりもパワーを少しあげているから。
夢先輩は、素早い動作での連続攻撃。
相手が夢先輩以外だったら、こんな攻撃はできない。
素早い指さばきがなせる技だ。
それを正確に押さえながら、俺も攻撃する。
それを正確に押さえられ、また連続攻撃が襲ってくる。
ミスしたら負けだ。
同じような事の繰り返し。
しかし俺は、今日はミスする気がしない。
不思議な感覚だ。
告白したい、ただそれだけをすると決めただけで、人はこれほどの感覚を手に入れられるのか。
あの時のうららさんも、今の俺のような感覚を味わっていたのだろうか。
息つく間もない時間。
このまま終わるのか？
　夢「あっ！」
ドリームの連携攻撃が崩れた。
その分こちらに余裕が出来た。
俺の得意な急所攻撃。
一番攻撃を受けたくない場所、右腕の関節を正確に捉えた。
この攻撃が決めてとなり、俺はシングルで優勝した。
　アナ「おめでとうございます。」
　和己「ありがとうございます。」
　アナ「どうですか？ドリームを倒した気持ちは？」
　和己「嬉しいです。」
俺は夢先輩を見つめていた。
そして見つめ続けた。
　アナ「あのぉ～、こちらに、マイクに話して・・・って、愛でも語りそうな勢いですね？」
俺がずっと夢先輩を見つめていて、夢先輩が照れていたから、アナウンサーも悟ってくれたようだ。
　アナ「えっと、愛をささやくのは、帰ってから・・・」
　和己「今じゃだめですか？」
　アナ「えっと、どうぞ！」
　和己「夢・・・さん、愛しています。付き合ってください。」
俺は右手を出した。
　夢「え、え、あっ・・・うん。」
真っ赤になった夢さんが、俯いて、俺の右手を握ってくれた。

１年後、俺は夢と共に会社で頑張っていた。
森学に入った頃には考えられない事。
頑張る事が嫌だった俺に、頑張る事のすばらしさを教えてくれたうららさん。
そして、頑張りの中で生まれた恋と、努力を認めてくれた恋人。

今の幸せが、頑張り努力する事を肯定してくれる。
何故俺は、一生懸命に生きる事がいやだったのだろう。
何故、格好悪いと思っていたのだろう。
わからないけれど、もし同じような気持ちを持っている人がいたら言いたい。
たとえ無駄な事でも、頑張って努力する事は、無駄にはならないと。

著者より

「転生と…アフターストーリー」を読んでくださいまして、ありがとうございます。
この作品は、タイトル通り、「転生と…」のアフターストーリーになっています。
「転生と…」も読んでいただけると嬉しいです。

２００７年　秋華

転生と…～アフターストーリー～

http://p.booklog.jp/book/48791

著者：秋華
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/kitaneko33/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/48791

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/48791

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.